羽様荷香作

須藤宗方畫

雲（くも）

（終編）

大阪

樋口隆文館發行

始

特105:221
帝國圖書館藏

雲

終編

羽檬荷香作
須藤宗方畫

大正
4. 12. 28
内交
帝國圖書館藏

雪於錦

樋口隆文館新刊小說目次

- 怪の怪　渡邊默禪作
- 美人魔　同君作
- 七首藝妓　同君作
- 風流菩薩　同君作
- 天狗武士　同君作
- 千里眼　同君作
- 橫山花子　同君作
- 迷ひ子　伊原青々園
- 毒百合　橋本埋木庵
- お雪幸七　同君作
- 姉と弟　同君作
- 片破れ月　同君作
- 野菊の家　小島孤舟
- 春待つ人　同君作
- 蔭に咲く花　同君作
- 梅花錄　同君作
- 浪がしら　同君作

- 女賊三人　鹿島櫻巷作
- 刺ある花　同君作
- 女香具師　同君作
- 戀の敗者　同君作
- 海の豪傑　同君作
- 罪ならぬ罪　和田天華作
- おとし兒　同君作
- 浪まくら　同君作
- 藤浪　春風樓主人作
- 隣り合せ　同君作
- 闇のうつゝ　須藤南翠作
- 浮木舟　同君作
- 男禁制　奴之助作
- 母の秘密　河原紅雨作
- 月に叢雲　同君作
- 血染半巾　中村兵衛作
- 妻の罪　同君作

樋口隆文館の出版物は東西各地新聞紙上にて多大の
好評を博したる物に付どれを讀んでも至極面白い

◀樋口隆文館新刊小說目次▶

小說 雲（終編）

羽様荷香

（一）

島御堀の骨折甲斐があつて、花枝は龍岡の家へ出入する事になつた。

眞佐子の思ふ通りであつた。始めて聞いた琴の音色の、その優しさは直に花枝の性格であつた。物心のつく頃から味はうて來た艱難辛苦は、彼女を立流な珠に磨き上げ、接する程の人をしてその容色よりも先つ心の光りに尊さ懷かしさを思はせた今時の娘に斯んなのがと、眞佐子は花枝を賞める毎に引例には喬子を出すのであ

る。

敬三が喬子に對する憤怒は容易に消えぬ。母の話に其名を聞くだけでも、髮の逆立つ思ひがする。快々として不快な日を送るのも其爲である。併し花枝が來るやうになつてから、不思議に家の中に一種の賑やか味が出來て、其人の來ぬ日は心の傷の惱みが遣瀨なく、書齋を暗くして其處に終日閉籠る事もあるが。母と談笑の聲賑やかに、軈て搔鳴らす琴の音に『敬三お前も聞きにお出でよ』と、報せに來られる時は妙に氣分が爽やかになる。モウ此頃では眞佐子よりも、琴の鳴らぬ日は敬三が寂しがつた。

龍岡家へ歡迎さるゝ花枝の爲に、双手を擧げて喜んだのは魚藤夫婦である。お春は花枝に逢ふて自分が輕卒の罪を詫た。藤三郎は父親藤吉と共に、猶此上の力を盡して、亡なつた芳枝と約束した事を果さねばと云ふ。御堀も賴もしい力添をして呉れる。花枝の前後左右は悉く嬉しい味方である。

人情の花が美しう咲く、廣い世界が別に有つて、そこには血も涙もある人達が、自分を歡迎する爲めに待つて居ると云つた、御堀の詞も沁々思ひ合はされる。

龍岡の方では來るのを待ち、花枝の方では行く日を待つ。共に眞島家に對して同じやうなる位置であるが爲か。御堀が云ふ如く微妙の天意か。琴の音が繫いだ奇しき緣は、斯して漸くに深く濃くなりまさるのであつた。

藤三郎の父藤吉に、喬子と敬三との緣談が立消になつたのを萬歲だと云つて喜んだ。此方から取消したいのを先方から破つたのは。大旦那樣冥土からお邸を護らせらるゝ爲である、と云つて喜んだ。左樣して大の花枝ピイキとなつて、眞佐子敬三に劣らず花枝の來る日を待つのに忙がしかつた。

（二）

花枝は眞佐子の好きな琴を聞かせる爲に、三日隔位に龍岡の家へ來た、眞佐子の居間で佳い音が始まると、奥からは敬三が勝手の方からは藤吉が、お茶のお客になりに集る、亡夫の追善自分の慰藉、之に越すものは無いと云つて眞佐子は喜んだが實は自分よりも敬三の結ばれた心を解きたいが爲である、父の嗜好を承け繼いで、音樂の趣味も有つ敬三が、一向に喬子に對する怨恨に我生を悲觀するやうな、痛ましい傾向に落ちて行くのを、切て氣散じの助けにもと思慮を盡した手段であつた。

『早く敬樣お歸りになれば可いだに』

『琴の音に引寄せられ、甘い茶を饗ばれてる藤吉が、面白い秘曲がお終ひになりさうなので、斯う云つた。

『今日は敬三の歸りは遲くなるかも知れません、島さんと一緒に參謀本部へ行つたのだからね、出る時に、今日水野さんが來られたら殘念だつて云つて居ました』

琴に油單を着せて隅に立かけて置き、花枝は姿を直して下座の方につく。

『お不在でございますか、今日は』

『敬樣居ねねだがお前樣緩りして下されましよ、なあ御隱居樣』

『島さんを連れて歸るから、一緒に御飯でも喫べるやうにと云つて居ましたからね花枝さん、今日は夕方まで遊んで下さいよ』

『イエ妾そんなに參ります度に、御造作をかけましては濟みません』

『はれ何云はつしやるだ。造作も何も無ねだ、お前樣來て下さるので、此處の家急に夜が明けたやうだよ、能る事ならお前樣、御隱居樣可愛相と思つて、ズウと居て下されば可いだに』

『ほヽほ藤吉が勝手なことを』

花枝も笑つた。

『第一お前樣來るまでは滅多に笑ふ事無かつたゞからね、斯樣太い手柄して歸らつしやると云ふので、御隱居樣も俺らも大歡びで待構へて居たのに、歸らつしやると

眞島の一件であの喬子と云ふ惡魔のハイカラ女郎が』

『これ藤吉、他人さんの事を左樣惡く云つてはなりませぬ』

と眞佐子が制める心は花枝に能く解つて居る、自分と眞島家との關係を憚るのであらう。

『だけどそれに違ひないだからね。敬樣をあんなめそ〳〵した人間に爲たのは、悉皆彼奴や强慾な浩造の野郎が』

『藤吉何を云ふのだよ、そんな事を花枝さんに』

と眞佐子は氣を揉んだ。

『ナアニお前樣の前だつて構はねゑだ、お前樣モウ眞島の諦めて居なさるだからねゑ』

『はい妾モウ眞島の事なぞは……』

語尾の微に消ゆるのを、眞佐子は左もあることゝ悲しう察した。

『諦めると云つてもお父樣に違ひないのだものねゑ、獨身になられてから、その思ひは又格別でなければなりません』

『イエ眞實でございます、斯うして此方樣や皆樣から御深切にして戴くにつけ……あんな邪慳な父……あんな人を何故父などと云つて慕ふて參つたかと思ひまして、妾あの頃の自分が合點が行かないのでございます』

半は僞り半は眞實の情を語つた、肉親の父は懷かしい、非道の眞島浩造は憎い、之が今の花枝の思ひであらう。

『お前樣來さつしやつてから、難しい敬樣が戲談口の一つも利いたり、久し振で家中笑ひ聲が一ぱいになるだ、俺こんな嬉しい事は無ゑともつてね出來ることならお前樣招んで此家の內の福の神樣にお賴みしてゐだアよはゝはゝゝ』

『それは本統に左樣ですよ、貴女と島さんが、敬三にも妾にも』

眞佐子が感謝の詞を遮つて、藤吉は面白いことを云ひ兩人を笑はせた。

「何方も福の神様に違ねねねだが、島の旦那あれ強い毘沙門様で、お前様優い辨天様だつべね、はゝはゝゝ」

（三）

或日の事であつた。藤吉は外から歸ると、眞佐子の居間へ急いで入つて來た。

御隱居樣、矢張島の旦那の推量に違はねねだよ、眞島の娘はあの唐津たら云ふ華族の家へ嫁入りするに極つたと云ふだが、何でも本人は疾に先方の邸へ入つてるといふ噂でござねますぜ」

『それは確かの事かねね』

眞佐子も豫て聞いて居た事ではあるが輿入れが濟んだとは今が初耳である。

「確かな所で悴が聞いて來たと云つて、婚禮の晩に乘込んで暴れて遣りたいと云ふ

だから、そんな事しては敬樣の方に未練があるやうで、反つてお邸の御迷惑になるで無ねかつて俺散々叱りつけてやつたゞが、悴が忌々しがるのも無理は無ねだともつてね』

『そんな事があつては大變だから、能くお前から注意してお吳れ』

と云つて眞佐子は深い考へに沈んだ。

『御隱居樣、俺此間から云はう〳〵と思つてる事があるだがね。眞島の娘が嫁入するると聞いては、此方も早く此話爲なければならねねだ』

藤吉は一膝乘出して。

『御隱居樣。お前樣、一体敬樣のお嫁樣何する積りだかね』

『敬三の家内かね、さあ妾も其事を今考へて居るのですが、あんな訝しな事になつて了つたのだから、喬子さんが他家へ緣付かない中に、此方が早く良い緣を探してと思はないではありません、島さんも其事に就て種々骨を折つて下さるのだが、偖

と云つて此事ばかりはねヱ。急に何することも』

『御隱居樣。それが有りますだよ。敬樣あの喬子に惚れて居たゞから、彼女の外に女は居ねヱやうに思つて居たに違ひねヱだが、あの喬子のハイカラ奴、あんな者女の仲間に入れる代物で無ヱだ。敬樣モウ目が覺めて居るだから、俺正直正銘の女見せてヱと思ひますだ』

『敬二の嫁にするやうな婦人が心當りでも有ると云ふのかね』

藤吉は大きく頷いて。

『有るだ。有りますだよ。それこそ一番に御隱居樣の氣に入るだ。それから敬樣も喬子と較べ物になる女で無ヱだから、キツと厭は無ヱと思ひますだ』

『まあそんな婦人が有つて?。それは何處の何云ふ方です』

『何云ふ人つて、御隱居樣能く知つてるだ。それ、あの水野さんでござヱますよ』

『あ、花枝さん』

と今度は眞佐子が我を忘るゝやうに座蒲團を前へ辷つて。

『藤吉。お前も左樣思ひますか』

（四）

花枝を歡迎する眞佐子は、疾から或希望を有つて居たのである。それが家思ひの藤吉の考へと、ピツタリ合致たから、兩人は其事を先づ島御堀に相談する。御堀は手を拍つて贊成した。

『其事は私から實は言出さうと思つてた所です。私は眞島の事が斯んなになると同時に、あの水野花枝と云ふ婦人を、貴女達母子で發見された事を、平凡な出來事と思ひたく無い。之は極めて神秘な……云はゞ天が龍岡の爲に、良緣を援けたものだと信ずるです。私が彼女の母の墓前で會つたといふのも。藤吉さんの一家が不思議

に彼の女に絡まつて居るのも之を一つにして考へると、龍岡の妻たるべき婦人は決して眞島喬子の如きものぢや無い。美しい品性と容貌を備へた彼の女と、我龍岡の間には、冥々の中に夫婦たるべき縁が繋ぎ合されてをつたものと見るべきだらうと思ふです。それで私は此家へ連れて來た時から、其意思で居たのですがね。唯貴女に此事を云ひ出さうとして躊躇して居たのは、眞島と違つて彼女には財産と云ふ物は一つも無い。又親戚縁者の倚る者も一人も居ない。……眞島浩造が父でありながら、それは御承知の如く浩造が認知しないと云ふのですから、云はゞ眞の孤獨ですさういふ身の上ですから、世間の批評だとか、又は御親戚中に異議が有つて、そんな事の爲に貴女が困られるやうな位置になると一層御心勞を増すやうなものだと思つて、實は云ひ出したいのを押へつけて堪へて居たのです』

眞佐子は又自分の考へが餘に突飛の爲に、人々に妙に取られはすまいかと、今日まで遠慮して居た事を話した、藤吉はモウ纏まつたものゝやうに喜んで。

『島の旦那も御隱居樣の眼も違はねわだ。あの水野さんを喬子の阿魔に較べたら、『それこそお月樣と泥龜でございますだ。ヘン今に見くされ、敬樣と御夫婦になら つしやつて』

『先方は先方さんで、何な事を爲さらうと、それはモウ此方に關係の無い事です。唯敬三の爲には、出來る事なら、そんな事の世間に發表されぬ中に、とまあ之も親の苦勞でございませうか』

『喬子と唐津夏彥の結婚ですか。あれは一つの喜劇…… イヤ悲劇と云つた方が可いですからな。今に御覽なさい。喬子が恐いしい色魔の爲に、散々の目に逢はされ、浩造もそれが爲に苦しめらるゝ時が來るでせう』

御堀は豫言者の如く、彼等の自ら招く災禍の慘憺たるものであるべきことを云つた。

斯の如くにして二人は、花枝を敬三の妻に迎ふべく頻に相談を重ねた末。花枝に

は御堀が當つて見る事になつた。

御堀に此前の時と同じやうに、乾度承諾させると云つた。敬三の方は眞佐子と藤吉が切り出す手筈を極めたが、藤吉は御堀と同じやうな決心で。

『これ敬様厭だ云ふたら、俺何處までも、喧嘩するまで行くだから、御隠居様も其氣で居て下されや。あの水野さん厭だチウて、世界の何處に正眞の女が居るもんだで』

藤吉は眞佐子と諜し合せ、先づ敬三の意を探るべく、或時それとなく觸つて見たそれは暑い日の夕方、涼風に吹かれつゝ敬三が庭の盆栽に水を注つて居る折だつた藤吉は子供の時から抱きかゝへた親みと睦みを有つて、敬三を主人とよりはモ一つ近しいものに思つて居る。彼が敬様々々と云ふ聲には、敬三の方でも一種懐かしい情味を感ずるのであつた。

（五）

『敬様、水ウ汲んで來うかね』

藤吉に聲を掛けられ後を顧いた敬三は如露を置くと縁に戻つて。

『何。モウ好いよ、石菖が水の欲しさうな顔を爲て居たから、一寸頭から注けて遣つたんだ』

『一雨來ても好いだが、敬様、この雲ではまだ當分降りさうにも無ねだかね』

『はゝはゝ雲の觀測かね、爺や、俺はモウ雲の研究なんか忘れて了つたよ』

敬三は無雑作に云つて、植木鉢の濕りを眺めて居る、藤吉も腰をかけて。

『敬様そんな事云つても、左様は行かぬのだ、島の旦那が云はつしやッただ、敬様雲の學問にかけては、數ある軍人様の中、誰だつて敬様に及ぶ人は無ねチウだ、お

前様が廢めるだつて、お上の方でお許しになる事で無ね」

「俺はモモ軍人でも無いからね」

『何、何云ふだか敬様、休職いふのは休む事で無ねか、お前様そんな事ばつかし云つて、御隱居様に心配かけるのは善く無ねだよ、軍人様の方は休職になつても、敬様は雲の學問で立派にお上様のお役に立つ人だから今に大層な出世をするだつて、島の旦那が云つて居るで無ねか』

『出世かね、爺やは俺に出世が爲せたいかね』

「何云ふだよ此敬様は」

と藤吉は躍起になる、敬三は閑靜な心で、涼しい水溜に目を落して居る、入日の色を殘した斷れ雲が、一片三片水の底を流れる。

『敬様は戰爭で大手柄しおつゝけ金鵄勳章貰ふだから、亡くならしやつた、大旦那様に對つて、御隱居様も俺らも大威張が出來るけんど、慾には際限の無ねものだで

これからまだ〳〵、と豪い出世を爲て貰ふだと思つて、俺ら力瘤入れて居るでねねか。それに敬様何云ふだよ、そんな事云ふもんだで』

『爺や、モウそんな話は止さうじや無いか、お母様は何爲て居られるね』

「御隱居様はお居間に被在るだ」

『何か爲て居らつしやる?』

「何も爲ねねで、唯ボカンとして、お前様の事ばつかり案じて居らつしやるだ」

母に絕間の無い苦勞を爲せる?、此事に想ひ及へば、藤吉の云ふところ悉く道理である。

『モウ決して御心配は掛けないから、爺やから、能く申上てお吳れ」

「心配かけねねだつて、今のやうな事聞かせたら　御隱居様の苦勞は絕ねるもんでねねから、これからは心持をザツバリと變へて、敬様俺賴みだから、お前様戰爭に行つた時のやうにあんな元氣出して下せいましよ」

『はゝはゝそんなに元氣があつたかねヱ』

『有つたかで無ヱ、それあの新橋で、御隱居様が俺のお供をして、大勢のお友達や何か、萬歳々々つて、お前様を中に取卷いて、皆でお前様を胴上したでねヱか』

『左様だつたなア』

『彼の時から、島の旦那は敬様と一緒だが、あれ位人情に厚い人も無ヱもんだ、お前様と斯う肩ア並べて、腕イ組み合つて、何方かゞ骨を拾つて歸ると云はつしやつた、俺あの時の光景が瞭然と目に殘つて居ますだよ、それから、敬様が瀛車に乘らうとする所へ、自動車で馳けつけたのが眞島の』

と云ひかけ、藤吉は急に口を閉じた。そして喉に物でも詰つたやうに目を白黑させる、敬三は彼方を向いて居た。藤吉は暫時默つて居たが。

『敬様、お前様あの憎い喬子の阿魔に復讐を爲てやる氣は無ヱだかね』

（六）

喬子に復讐を爲る?。藤吉の詞は、最前から胸中の騷ぎを强て抑へて、面は何ともなげにして居た敬三を、モウ冷靜の狀には置かなかつた。

『復讐をすると云ふのか』

夕闇は庭から緣に蔓つて、植木棚に絡まつた、夕顏の花が鮮明になる。敬三の聲は强く響いた。

『お前様を病人同様にしたのもあの喬子なら、御隱居様を苦しめたのも矢張喬子の阿魔の爲る仕業だゞから俺憎くて堪らねヱだけれど、悴の云ふやうに、拙手をして此方の名を出すで無ヱともつて、じつと辛抱して居るだがね、敬様、俺考ヱがあるが、お前様聞いて呉れるかね』

敬三は頷いた。淋しい彼の心には、大きな空虚がある。眞島に關した事は一切聞くまいとはするが、不快な事ながらもそれが一番刺戟が強い。從つて煩悶の惱みは寂寞の苦しみよりも或は優しかと思ふ程、彼は裔子の爲には頭腦を病的にされて居る、空虛の心には毒をも盛りたい。

『復讐と云ふだけんど、喧嘩して相手の頭打ち返すばかりが仕返しで無ねと、俺思ふだがね。相手が此方を輕蔑したり侮つたりすれば、此方はそれ見たかに、輕蔑の出來ねゑ樣に爲て遣るが、これ本統の復讐と思ふだが、敬樣何思ふだかね』

『フム。それから』

と敬三は唯先を聞かうとのみ爲る。

『俺敬樣に其仕返しがして貰ひたいだよ。御隱居樣も俺と同じ考へでござらつしやるだから』

『何云ふのだね。爺やの云ふ事は俺には能く解らないが』

『解るやうに云ひますだ。敬樣、お前樣早くお嫁樣貰はつしやれよ』

『何んだ。其事か』

敬三が氣の拔けた顏をするのを、藤吉は一生懸命此方へ引付やうと努める。

『其事かで無ねだ、それが一番の復復でございますぞ』

『復讐の方法に結婚を敎へて吳れる爺やの深切は有難いがね……俺はモウそんな事は思はないから』

『思はねゑつて？、敬樣復讐は爲ない積かね』

『イヤ其事は兎に角、俺はモウ結婚は斷じて爲ない、それはお母樣にも漏らしてある、結婚の事なら爺やも云ふて吳れるな、俺の決心は堅いのぢやから』

藤吉は呆れて顏を凝視めつゝ。

『では敬樣は一生涯鰥で行くと云はつしやるのかの』

敬三は事もなげに頷いた。

『そ、それでは敬様、お前様あの喬子の阿魔に口惜しい目に逢はされてそれを何とも思はねゑで、立派な仕返しをする氣も無ゑと云はつしやるだね。お前様にはあの喬子ばかりが女に見ゑて、他には貰ふ女房が無ゑと云はつしやるだね。これ敬様、お前様何でそないに意氣地の無ゑ人になつたゞね』

中間に置かれた莨盆を取つて除け、顔を赤くして藤吉はすり寄つた。

『お前様の名譽の傷が厭だと吐して男に恥辱面かゝせて逃げた喬子で無ゑか、その仕返しは、お前様早く立派な奥様貰ふて、これ見たかにするのが一番の仕返しで無ゑか、それにお前様は

『爺や』

と制した聲は沈んだ。

『俺が妻を貰はぬと云ふ決心には理由が有る。喬子に復讐を爲ると云ふのは私の感情ぢや。感情の爲に過られて俺が輕卒の事をしたら、又幾人の喬子が出來やうも知

ぬのじや』

『何と云はつしやるだ』

妙な詞が藤吉には解されぬ。

（七）

復讐と云ふ詞に一たびは、喬子に對する深い怨恨の情を刺戟され、燃ゆる焰に油を注ぎかけられた如き思ひをして藤吉が何を云ふかに耳を傾むけて居た敬三は、結婚と聞て忽ち以前の冷靜に復つた、灼熱の鐵は水に投じられ、冷たい土塊の如く、その態度も悄然となつた。我詞を解し得ぬ藤吉に向つて。

喬子に對する怨恨と云ふ事と、私が結婚しない決心とは別じや、その理由は強て質ねて呉れるな、爺やは私を苦しめたくは無いだらう』

藤吉が否でも應でも説き伏せると云つた、花枝を妻に迎へることの承諾を敬三に求める交渉は、斯うしてまだ肝腎の本題に入らぬ前に脆くも打砕かれた。断じて結婚せぬと云ひ張るのに向つて相手の女を云ひ出す機會は無かつた　藤吉は這々の体で引下り、此事を眞佐子に告げた、眞佐子は豫期せぬ事でも無かつた、それは敬三の心は斯うだらう、と云つて自分の推量の儘を話した、藤吉は膝を打つて。

『あゝ御隠居様、それで敬様の云ふ事始めて俺腑に落ちたゞよ、俺が結婚したら、又喬子見たいな女が出來るつて云はつしたゞが、それじや敬様。あの顔の傷痕が醜悪ねだで、それで御自分を卑下して、一生奥様持たぬと云ふのだね』

『妾には唯當分妻帯は爲ぬとばかり云つて居ましたが』

『御隠居様』

と藤吉は老眼に涙を浮べた。

『俺斯なると、敬様の戰爭の勳功が恨めしいだ。人並すぐれた好ね美男だつたで

あの喬子の阿魔だつて最初女の方から敬様に悶つ惚れたと云ふで無ねか。所も有るだに、大事な顔にあの傷痕だから、敬様氣ィ萎すに無理は無ねけんど……それが爲に何も卑下する事は無ねだ、一生奥様貰はぬなんて』

『それが本人になつて見ると、又喬子さんの様に、あの傷痕に驚いて逃げ出されると云ふやうな目を、二度と繰返すのに忍びぬ……妾にも同じやうな苦勞を掛けたく無い、と云ふ心なんだらうが……叱るにも叱られない事情だからねね』

と母の胸は悲しさに裂けるやう。

『俺は敬様のお心情が痛はしいだ』

と之も涙に聲が曇る。

敬三が非妻帯の決心は、眞佐子の察する通りであつた。彼は喬子の變心に逢ふていまだ知り得なかつた人情の嶮しさ恐ろしさを經驗した。で一方には喬子の輕薄を怨み、一方には自分を悲觀した結果、彼の天刑病者が社會に對する德義を守り、結

婚を避けるが如き精神を以て、自分の醜惡な容貌で配偶を求める事の、美を好む婦人に對しそれは一種の罪惡であると云ふことに考へ及ほし、こゝにいと堅い決心を爲たのであるが、顔の傷痕よりも幾層倍酷い心臟の惱みは、又しても彼女を憤ると共に我を淋しがらせる、人は苦熱を忘るゝが爲に憧がれ待つ此頃の涼しい夜も、厭な夢見るが爲に、彼には晝の如く苦しかつた。

（八）

『宛然深秋のやうだね』

と云つて此方を振向いた夫の顔は、石に激する溪流の、切崖の空に樹々の緑に覆はれ、歩々に踏む巖道は黝黒に、名も知らぬ怪鳥の人を呼ぶやうな音を立る。その冷々とした清徹つた谷底の空氣の裡に、すつきりと繪のやうな鮮明さに浮いて、まことに丈夫の凛々しい美しさが、姿の何處にも溢れて見ゐる、げにあの顔の大創痕が、拭うたやうに消ゐて了つたのは、人の力か神の業か。

向ふに見ゐる青い山の麓が、世に聞ゐたラジウム溫泉で、新婚の夫婦は樂しい旅の打止めを、此勝地の靈泉に遊んで、やがて都會の活動に入る準備に、飽くまで身心の保養を專らにした、東京の暑熱は想像するばかりも眼が光る新聞で讀む氣溫の高さに驚かれる昨日今日、溫泉の里は終日蟋蟀の歌で冷々と、山谷の氣は感冒引かぬ注意も要る、斯んな夏知らぬ結構の土地に、唯夫婦でばかり居ゑのは勿体ないやうにも思はれる。お母樣もお越しなら可いに、島さんも見ゐればと、花枝は懐かしい人達の事を、物に景につけて噂をした、その度に敬三は唯笑つてばかり居る、今の互ひの樂しさに、他の事なぞ思ふ餘裕は無いやうに。

今日も日課の散歩に出掛けた、毎日膳に上る鮎の魚は、此下の清流で村の人達が面白い漁法をする、瀬走る姿に食味を饒ならしめやうと云つて、夫が誘ふた、危い

獨木橋は手を取り合ふて渡つた。轟々と鳴る瀧の音に、袂を連ねて山の峽に憩ふた歡樂の空平和の地、兩人の行くところ歩むところ、自然の彩色は情あるが如くに捧げられる。佳い景色を發見た夫は、妻を喜ばせる爲に先づ驚嘆の聲を上る。妻は夫の優しさが、繪がいたやうな山水よりも嬉しく、眺むる目よりも心が溶けさうである。

『ヤ皷ヶ瀧七丁とあるね、あの音が左樣だらう、花さん何だ、まだ行つて見る勇氣があるかね』

『參りますとも、何處までも參りますわ』

『はゝはゝゝゝ大變強くなつたね、その調子なら、私と一緒に高い山嶽へでも登れさうだね』

高い山嶽へ天象の觀測に登る夫の任務は、東京へ歸ると其場所が決る筈である。

『ほ〳〵ほ妾も雲の上までゝも……』

と云つて、後の、貴郎と御一緒ならば、自分だけにしか聞ゑなかつたらしい。

『それでこそ私の妻だ、雲の上は好かつたはゝはゝゝ』

と夫が左も愉快さうに高く笑つた時、其聲に招かれたやうに空から舞下つたのは今まで彼方に仰がれた雲の峯の一角が、恰かも夫婦を迎へるやうに溪流から崖を籠め、濛々と足下に湧き立つた。

『まあ花さん一緒に乘らう』

『あれ貴郎危なう……』

× × × × × ○

× × × × × ×

『水野さん、水野さん』

と梯子段から首を出して、お才婆さんが聲をかけた、寢苦しい宵を、蚊帳の中に横になつて居た花枝は、いつかうと〳〵と眠りに入つて居た。愕然として覺めて襟

かるゝ今の夢。

（九）

奇しき夢から呼覺されて、ハッとした花枝は、まだ夢の中の雲に乘つて居るやうな心持で、窓から射す月光りを、蚊帳越しに幻影の如く眺めた。お才婆さんはモウ梯子段を下りて、まだ閉めぬ菓子店で何やら爲ながら、起した花枝に話をしかける。

『何やら魘はれて居てるやうだから一寸起して上げたのですよ。ほゝほゝゝ今夜は珍らしく宵寢だことね』

漸く判然となつて蚊帳から出たが、明るい月光の顏を照すのも恥かしい氣がして今の夢がまだそこらに有りは爲ないかと見廻される。

『一寸裁縫が手隙だもんですから、……ツイ横になつて居て』

と、それから後の夢の事なぞ、人に話されぬ大秘密は、大きな重石となつて今の自分の心を押へつけて居る、ホット太息して窓に寄ると、折も可笑しい表通りを、家相八相待人緣談……、周易判斷の聲が通る。

八卦と云ふものが的中るものなら、今の此の思ひを占なうても欲しい、と、花枝は柱に凭れた儘、深秋のやうだと誰やらに云はれた、夢の溫泉の里を想はする、冷々とした夜氣に佇んだ。

『はッはッはッ』

と妙な刻み笑ひが起つた。

『それはお婆さん、當るも八卦當らぬも八卦じやよ、一つ占て上げやうかな』

『今の賣占者に、お才婆さんが相手になつて居るらしい』

『だけど妾には何も占て貰ふ事が無いもの、占て貰へば、まあ死んで行く所位のも

のさほゝほゝゝ』
『左樣云つたもんで無いて、運氣は人の生命を支配する。假令ば人間一生の大事だね、婚禮の如きがじや』
『ほゝほ、このお婆さんに緣談でもあるまいね』
『まあさ、物の比喩がさ。お婆さんだつて一度は花嫁御の時があつたらう』
『さあそんな事も有つたか知ら。人にでも聞かねば分らないねえ』
と云つて、婆さんは堪らぬやうに笑ひながら。
『水野さん。目が覺めたら一寸下りてお出なさいよ、面白い人が來て居るから』
『面白さうなお話ですね』
と、花枝は店頭を見下した、其處には汚ならしい賣卜者が、それでも垢染た衣物の上にくしやくしの袴を穿いたのが、紙捻で繕うた古鞄を傍に置き、腰を下して頻に腮を動かして居る。

『お婆さん一生の幸不幸は、その嫁入の時にチヤアンと定まつて了つたで。それを知らずにヤイくく云つて騷いでも不可。そこを卜するのが我が易學の事じや、乾兌離震巽坎艮坤。彼の歌辻占、或は待人の疊算、これ皆 源 を我易經から發して居て。と、まア斯な難かしい事を云つて歩いても商賣に爲らん。見料心持で極手輕に占ます。二階にも何誰か居られるやうぢやな。何うじやな運氣緣談待人』
と云ひながら菓子箱の硝子葢を自分で明け、五厘の落雁を一つ捻んだ。花枝は婆さんに招ばれて交際のやうに下りて來た。

《一〇》

花枝は二階から下りて來る。白い足が煤けた梯子段に見ゐると、摘んでた落雁を一口に頰張つて、薄穢ない賣占者は急に勿休ぶつた。一文菓子屋の二階から、斯ん

な美人が現れて來やうとは筮竹を弄くつても出まい卦である。口の邊を白い粉まみれにして、目を睜つた樣を、お才婆さんは可笑しがつた。

『花枝さんも一つ占てお貰ひなさいよ。見料は心持ですとさ』

『ほゝほ妾なんか何を占て貰ひたいやうな事が』

云はせも果ず落雁の粉の口でカラ〳〵と笑つた。

『有る。有る。あんなはお婆さんと違つて、これから花を咲かすお人ぢや木少うして華即ち盛なるの象じやテ占て上げやう。と斯うと先アづ緣談じやな、なあお婆さん』

『それはお手の筋。ねね水野さん』

『あらおばさん』

花枝は赤い顏をした。

『イヤ手の筋墨色も占て呉いなら見るがね』

とモウ根を下して、例の見料に有りつかねば動くまい氣勢。それでも何處やらに俗の脫けた、女ばかりと侮つて頭巾をぬぎさうな恐ろしいのでは無かつた。婆さんは頻に微笑んで。

『水野さんあの件を占て貰ひなさいよ。島さんの件さ』

『ほゝほおばさん』

『搆はないじやありませんか。占て貰つたつて。當るも八卦當らぬも八卦さ』

『お婆さん。緣談じやらうがな。それ、それに違ひないテ。それ位の事は顏を見たばかりで判る』

と落雁は繁々と美しい顏を凝視る。花枝は緣談と云はれた事と、今見た夢を結び合はせて、胸がおど〳〵躍るのを覺ねた。突然に。

『ほう。あんたは酷い苦勞を爲た人じやな。人の苦勞……親の苦勞かな。親じやらう。母親か父親か。其他一家親類離散の憂ひがある。譬へば根なき浮萍の水に漂ふ

形とある。何じやな、的中らぬかな」
花枝と婆さんは顔を見合せた。
『天庭と云つてな。卽ち此處じや』
と自分の額を指でついて。
『天庭高く豐廣にして潤しく、髮際は卽ち生ね際じや。淸らかにして形善きは富貴官祿を主るとある、あんたは眞に善い相を有つて居られるが惜し事には氣色に於て審かしい點があるテ、皮の內にあるを氣とし、皮の表にあるを色、之れを併せて乃ち氣色と云ふのじやが、あんたは白氣白色といつて、愁殺するところの相が見られるテ、まあ事に現はして云はうなら、今の親兄弟の例へじやな愁は憂ひ殺は殺す。あんた親御で苦勞は無かつたかな』
お才婆さんは急に敬意を拂ひ出した。
五厘の落雁先生、豪い事を云ひ出して穢い風体も何やら尊げに光るかと思はせた、

（二）

賣占者はまだ種んな事を云つた、其去つた後でお才婆さんは、モウ全然驚嘆して了つて、彼人はあんなに穢う見ねても、屹度神樣のお告を貴女に取次ぎに來た人に違ひないと云つた。
『掌中の物見るやうに、何も彼も的中るぢやありませんかよ、ねね水野さん、何とか云ひましたね、龍が水を呑んで何うとか』
『ほゝほ、左樣でしたね、面白い賣占者ですわね』
『龍が水で、妾不思議な事を考へついたの、それ貴女が水野さんね、それから彼の島さんの件が龍岡さんでせう』

花枝は此老女には何事も隱さなかつた、此間から島御堀が足を運んで、或交渉が始まつて居る、その事を婆さんは熱心に贊成して、寂しい田舍へ入らうとする味氣ない境遇から一轉して、春の暖い陽光が花に輝くやうな、美しい幸福が來たことを花枝の爲に衷心から喜んで居る、それで、花枝の爲に意が決らぬらしいのを、頻に焦心しがつて居たところであるから。妙に飛込んで來た賣占者が、頼みもしないにペラペラと云つた事が、悉く花枝の開ける運を透視したやうな善い事づくめだつたので、いよ〳〵躍起になつてそれを勸めやうとするのである。

『龍岡の龍に貴女の水野で、龍と水だつたら賣占者が云つた通り、今度の縁談は貴女にも先方さんにも、どれ位幸福になるか分りませんよ』

これから合性の事星廻りの事と、賣卜者が云ひ殘したことを、宿命論者の婆さんが並べ立て說きた。

島の好意老婆の勸誘、それは花枝に嬉しさが餘るほど受取れるのである。彼女の

意中には、此時既に大きな秘密が有つたからで、それは龍岡敬三に對する戀であつた。

七重八重に咲く花も、種子の一つは微細な物である、花枝の心に植ゑられた戀の種は、敬三に對する同情が起因であつた、名譽の傷を忌み嫌ふて、我とは異腹の妹喬子が所業は、敬三を痛ましい悲觀の淵に突落したのである。

男の身として、結婚式を擧ぐる間際に女に愛想盡しを爲れたといふ事、それはどれ程の苦痛であらうぞ、この事はまだ其人に會はぬ前から、噂を聞いて氣の毒さに思ふた、それが一たび親近になり、目のあたり涙に濕る龍岡一家を見てからは、一面には眞島家に繫る縁の自分の位置として、喬子の間違つた行爲を謝らねばならぬそれが自分の大きな責任であるかのやうに感ぜらるゝ。又一方では敬三の煩悶と眞佐子の憂愁が、心の底から慘ましく、涙がこぼれる程同情されるのであつた、この同情はやがて強い戀となり、彼女を樂ましめ、又彼女を苦しめた。

（二二）

花枝に最後の決答を促すべく、島御堀が尋ねて來た。彼は吶喊して敵に逼る勇氣を以て、花枝を說いて止まぬのである、敬三が無妻主義を主張し、結婚を拒むのに對して、彼は只笑つて何とも云はなかつた。氣遣ふ眞佐子や藤吉に向つては、自分に成算があるから任せて置け、今に無妻主義の自然に折れて挫ける時が來る、それは花枝の方の返答に依つて唯早いか遲いかの問題であると云つて、おのれは直押に花枝を說きにかゝつて居る、此の前の時に約束した日が來た、時も違へず微笑を湛へた髭の面はお才婆さんの店頭に現れた、婆さんも今は彼の應援者である。

『貴方お喜びなさいませよ、何うやら雲行きが變つて參りしたよ』

と云つて、そつと二階を指した、御堀は太い洋杖を置くのも忘れて上りかけた。

『妾も種々お勸めしますとね、あゝ云つて返詞を鈍つて居られるのは、何か外に考へがあるので、龍岡さんの事は、水野さんの方から、餘つ程あの何でございますよほゝほゝゝゝ旦那や妾が野暮なんでございますわ』

お才婆さんは笑つて其後の花枝の樣子を報告した、察するところ當人は龍岡を疾から戀慕ふて居る、そこへ結婚談であるから思つたり叶つたりであるけれども、そこは苦勞に揉まれて年齡よりも遙がに分別の聰い、世馴れた花枝ながら、戀には初心な娘氣の、ツイ恥かしさが一ぱいで、眞情を打明けるのに臆しての事であらう。

『モウ旦那それに違びございませんよ、今日は屹度お談が纏まるだらうと思ひますこんなお目出たい事はござゝいません』

と氣の早いお慶びの挨拶まで加へた。めでたいと云ふ高聲に花枝は氣が注くと、其人が來て居る樣子である、彼女はすでに答へるところを定めて居た、いつに無く從容いた樣で御堀を迎へた。例の單刀直入で。

『約束の日だと云ふと、貸した物でも催促に來たやうだが、花枝さん、考慮は決したですかね』

『ハイ度々御苦勞をかけて濟みませんでございます、妾今日は御返詞を致す積でお待申して居りました』

判然と云し詞から、その態度にも強い意思の閃きが見ねた、御堀は諾否の何方かを氣遣ふて、思はず膝を進ませる。

『ウム、而して何決したですな』

『妾龍岡樣に嫁りませう』

『エッ、龍岡との結婚を承諾して呉れますか』

『妾のやうな……斯な見る影も無い者を、貰うてやらうと仰有る龍岡樣や、貴方に對して、まことに相濟ん事と存じながら、今日まで御返事の遲くなりましたのは、妾はあの……父の事で考へさせて戴いたのでございます』

と聲は急に沈んだ。

『父の事と云はれると？』

『ハイ、龍岡樣からお怨みを受けて居ます、父の眞島浩造の事でございます、島樣妾あの眞島の娘でございましても、龍岡樣はお厭ひは無いのでございませうか。妾には喬子と云ふ腹違ひの妹がございましても、龍岡樣はお憎みは無いのでございませうか』

〈一三〉

自分があの冷酷無情な、人道を歩み得ぬ眞島浩造の娘であると云ふこと。それが實に花枝の爲に大きな煩悶であつた。龍岡一家の爲には眞島は敵である。敬三の爲には喬子を屠るも猶飽き足るまい恨である。自分が其人々に肉親の關係を有つて居

る身でありながら、敬三を戀するのは、實に悲しい矛盾では無からうか。

斯う思ふ一方には又それに正反對の考へも起る。憂ひに閉じられた龍岡一家を慰め、敬三の悲しみを破るのは、切に自分の果さねばならぬ義務であり責任であるやうに感じられる。この戀遂げて夫とかしづく身ともなられたら、妻として捧ぐる精神の据る處はそこであらう、世間の妻たる女が我夫に仕へて行く、それよりも幾層倍の誠を盡し愛を捧げるのが自分の行はねばならぬ道ではあるまいか。

此兩つに思ひ煩はされて居る所へ、島御堀が中間に立つて、自分を敬三の妻にとの話である、戀の心には夢かと嬉しく、現の身には罰せらるゝ苦しみである。眞島浩造を父とし、喬子を妹とする自分でも、龍岡の家に迎へらるゝ事が出來やうかと云つたのはそれである。御堀の方にはそれに答へる詞を豫てから用意して居た。

『花枝さん、貴女をお母さんの墓の前で發見した私が、其時世間から隱れやうとした貴女を强ひて制めて龍岡の所へ連れた、あの時に私の云ふた言を記憶して居られるでせうね、血も涙もある人達が住む……人情の花が美しう咲くお互の世界が別に有ると云つたことを、私はこの結婚を成就させて、あの私の約束を果さうと思ふ、貴女なら龍岡の家を樂しい世界と見ることが出來る人だと信でて獨斷に媒介に立つた私は、決して貴女を苦しめやうとする者じや有りません』

『イエ妾貴方の御深切は……、唯妾父や妹の罪を思ひますと、空恐ろしいやうで、お詞を好いことにして龍岡樣に參ることが、些とも此方の身分を考へない、餘りにはしたない行爲のやうに思ふものでございますから、それでツイ御返詞を致しかねて居たのでございます』

御堀はいよ〳〵優しく氣高い其人の精神に感じた。

『眞島の家と何んな關係を有たれやうとも、それは決して龍岡と貴女との結婚を妨げる障害には爲らない、のみならず、眞島浩造は明らかに貴女を捨て居る、自分の子と認めて居ない、これは貴女の情としては、まことに辛い悲しい事であらうが、

それが爲に貴女の運は立派に開ける秋か來たのです、花枝さん、貴女は龍岡の妻さなる事が、眞島浩造の子と爲るよりも、遙かに貴女の爲に幸福である事は覺つて居られるでせうな』

怨しい父と戀しい人と、我終生を托するはひとり彼の人のあるばかり……。

花枝から返事を受取つた御堀は、青島戰で敵壘を乘取つた、あの時と同で愉快の心で龍岡の家へと急いだ。

（一四）

『これから龍岡と爭論です、貴女方はそれに搆はず、準備の相談を始めて下さい。何と云つても私が說き伏せるですよ』

と云つて御堀は奥へ行つた、今花枝の所から駈付けた彼は、眞佐子や藤吉に簡單

に花枝承諾の返詞を漏らし、兩人が喜び勇むのを後に、敬二が例の獨棲主義を說破すること猶花枝をして結婚を承諾せしめた如く、一擧に兩つながら功を納めんとして、勝ち誇つた勢ひで、其書齋へ突進したのである、暫らくすると、御堀の聲が漸く次高くなる。

『すると何かい、君は世間の總ての女を悉くあの眞島喬子の如き者と見る、と云ふのだね』

『イヤ絕對に左樣云ふのぢや無いがね』

『だつて今云つたのぢや其結論になるぢや無いか、其顏の創痕を喬子が嫌つた如く彼女以外の女も又君を忌み怖れるに違ひない、と云ふのだらう、即ち總ての女は悉とく喬子と同じ人間である、同じ程度の者であると云ふのと同じ事じや無いか』

『僕は左樣云ふ風に他を呪ひたく無いのだ、左樣云ふ觀察をすれば、自然に喬子に對する怨恨と同じ思ひを他に移さなければならぬやうになるだらう、僕それが避け

たいのだ、まあ早く云へば僕はこの容貌の爲に配遇を求める資格は無くなつた事を自覺したのさ、それで一般の婦人が喬子と同人間であらうが有るまいが、それは思ひもすまい、考へもすまい』

『さあ、そんな事を云ふのが君の悲觀が生んだ病的の發作じや、そもそもあの喬子と云ふ女がだね』

『まあ僕に云はせて吳れたまへ、僕之は深く考へた事だからね』

と敬三は努めて冷靜の態で云つたが、落ついた詞の底に、言知れぬ哀情が籠るのを、御堀は切に感ずるのであつた。

『他を見ないで自分を考へる、これが寧ろ慰安である事を僕は發見したのだ、現今の亭樂主義とか本能主義とか云ふのとは、或は宗旨が違ふかも知れないが、僕は此理性に活たいと思ふ、身に惡疾のあるを知つたら、その病毒を自分以外の社會に及ぼすまいとするのが乃ち理性の尊さであらうと思ふ』

『イヤそれは比喩を誤つて居る、名譽の負傷と忌むべき惡疾と、何處を同じだと云ふのか』

『僕の塲合に於て結果は同じことだ、考へて見たまへ、玆に十人の婦人があるとする、その人達の面前に美と醜との極端を並べて……草花のやうな物でも可い、それを任意にだね、好みに任せて取らしたら何だらう、十人が十人共、醜い草は顧みないで美しい花を取るだらう、鬼薊は指も觸れられないで。薔薇の花は襟に挿れるだらう、それだ、美を好むのは婦人の最も鋭い、而して最も優しい官能……』

『待て、待て、それならそれと爲る、それで薔薇の美しいのを愛するのが一般の婦人の嗜好であり趣味であるから、鬼薊の如き醜い容貌を持つ君は、配偶を求めないで終生を獨身で暮すと云ふ主張だね』

『それは僕の道德だと信ずる』

『可、それなら僕の仕事はいよいよ徒勞で無かつた』

と御堀は短い言葉に満身の力を籠めて云つた。

『十人の婦人の中、唯一人、薔薇の美しいのを捨て薊の花を擇ぶ者があるとする、龍岡ッ、君は此婦人に出會つたら何する？』

（一五）

謎のやうな問答は暫く兩人の間に續けられた、敬三の聲が次第に低うなるにつれ御堀の熱辯はいよ／＼冴ゑて來る、彼はすでに七分の勝利を占めて居る、十人の中の唯一人に、美しい薔薇を捨て薊の花を取る婦人が有るとしたら、其時は何うするかと云つて、鋭く詰り寄つた勢ひは、暗い影に閉じられた悲慘な友を、明るい光明の中に引出さうとする尊い努力が見ゑた。

『僕はそんな事を信じない、信ずる事が出來なくなつたのだ、僕には痛切な經驗が有る』

『それは喬子の經驗だらう。彼を信じたのが君の過失であつた如く、十人の中に一人の婦人がある事を信ぜぬのは、再び同じやうな愚かな失敗を繰返すのぢや、まあ僕に任せて呉れ。唯一人の婦人を發見するか何うかゞ問題であつて、それに依つて君の獨身主義は根根から覆へされるのだ』

『左樣獨斷して呉れたまふな　假令そんな婦人があるとする、まあ居るとしてだね、さう云ふ人に對つては、僕は一層僕自身を忌避しやうと思ふ、それが不具者同然の僕の守るべき道德なんだからね』

『はゝはゝゝゝ、道德は君ばかりの占有ぢや無い、唯一人の婦人にも聰明な道德がある、道德の命令に從ふて、君に戀を捧げたら何うする』

『戀を！』

と云つて敬三は寂しく笑つた、戀といふ詞は彼の耳に夢の中の音樂のやうに聞ゑ

る。果ない夢の外にして、自分に何の戀ぞ愛ぞ。

『そんな物はモウ僕には無いよ』

『君に無くても女が捧げたら何する』

『そんな事があつたらそれは第二の喬子だ』

喬子の名を口にする度、敬三の眼には雷光のやうな凄い閃きがあつた。

「君、モウそんな事は賴みだから云ふて呉れたまうな。僕此頃苦しい煩悶から脫する事が出來かゝつた所だから、そんな事を聞くさ反つて苦しめらるゝやうなものだ」

「苦しめるのか樂ませやとうするのか。それは今に判る時が來る、ぢや可いね、それに決めるぞ』

矢庭に立上らうとする御堀を周章て引止めた。

「決めるんだ何をきめるんだ君』

『結婚さ、十人の中の唯一人が發見つて、それが君に神聖な戀を捧げて、それが決して第二の喬子で無つたら其婦人を妻にするのに躊躇は爲ないだらう、獨身主義など引込るだらう』

「そんな物好きな婦人が居るものか』

『居つたら何する』

『居つたら僕を其婦人の前へ連れて行きたまへ、スグ喬子に爲て見せるから』

御堀は默つて敬三の手を握つた。

『龍岡ッ。君の心は喬子の爲に荒されて居る、それを救ふのは我輩の任務ぢや、君が其婦人を喬子に爲るか。その婦人が君を以前の龍岡敬三に爲るか、まあ默つて僕に任せて置け』

斯云つて御堀は部屋を出た、敬三は例時のやうに其儘靜と坐つて居る事が出來なかつた、何とはなく心の動搖を覺ね、後から隨いて出やうとすると、モウ御堀は母

と話して居るらしい、茶の間に當つてその大きな笑ひ聲。

（一六）

あの縁談が決つてから、花枝が龍岡を訪れるのは今日が初めてである、改めて正式の手續きを濟すまでは、前從通に出入りを爲て呉れるやうと、御堀からも、夫から眞佐子からは特に懇の手紙が來た。花枝は此手紙を抱いて泣いた、母なき後の母は此人である、親に縁薄い自分は、斯うして第二の母を授かるのである、優しい手紙の文句にはモウ自分を娘と呼ばんばかり、濃かな慈愛が溢れて讀まれる、殊別花枝は深く感動させたのは、眞佐子が敬三を思ふ親ごゝろの至り盡くせることであつた世間の親みな〳〵此こゝろならぬは候まじくも、妾には敬三をいとしさ不憫さ、又格別に候を、お前樣お察し下され候事と存じ候、世間は稀れなる手柄とたゝへ、我

家にとりても名譽此上なき事に候へども、まだ年若き敬三の身にとりては、勿論私事の憚り多きは辨へながらも、不具者同樣に見らるゝあの創痕の辛く悲しさは、眞島樣との約束あのやうに成行き、喬子さま心變りの事ありしが爲に、恨みに結ぼるゝ心は、唯それのみの遣瀨なく〳〵、變れるさまの姿に、口惜しの涙たへざる有樣を、朝夕傍に見る妾の胸は張裂くるばかりに候、唯此上はいかにもして急ぎ良縁を求め、寂しき敬三の心を慰めんものと、それのみに心碎き候折柄、はからざる引合せにて、お前樣とお目もじ致し、無理強なるお願ひの叶ひて、親しき御交際つゞけ申候事、偏に妾共おや子の上に有難き神佛の御加護あるげにも覺られ、妾の嬉しさ譬へんやうな無之、こは島樣よりも聞取下され候こゝと存じ候、無禮なるお願事ながら、お前樣ならで敬三の心の病救はん方世に無きを知り、島樣におすがり申したる次第に候。本人さへ母たる妾さへ、胸つぶるゝばかりおのゝかるゝあの醜き創痕の、お前樣にいかばかり情なく憂きことに候はんを、それには一言のお詞さへも無

く、却つて眞島樣とお親子の間柄なるを心にかけられ、種々とお氣づかひの程、一々承はり候て、妾たゞ有難涙に暮れ申候、此思ひいたらぬ筆には盡しがたく老の命こめたる一心に、及ばぬながら此後お前樣常日頃よりお嘆き多き御兩親の事、妾心づくしに聊かのお倚頼とも相成り申すべく、その事のみをこゝにお約束申し上げまゐらせ候……。

あゝ子を思ふ親の心……、それは今は世に無い母で知つた、自分を孤獨で置くまいとして、母は死ぬ迄も心を狂はせたでは無いか、眞佐子の上がそれと同じである眞島家の爲に苦しめられた敬三の爲に、良縁を求めて苦勞するのは、父に捨られた自分を眞島の家へ入れやうとして惱んだ母の塲合と同じである、母は其爲に二十年の意地を捨やうとした、眞佐子は親となるべき身分で自分に感謝の禮を捧げる、あゝ親ごろゝろは斯うも深いか。

眞佐子の手紙は花枝に恥かしさをも忘れさせた、今までの通りに來いと云はれても、夫たり親たるべき人の家へは、心が改まつて行き難くかつたのであるが、眞心籠る手紙の前では、自分を僞る事が出來なかつた、龍岡の門をくゞるのが、今の自分に何よりの慰藉であり、愉快であるものを。

（一七）

『まあ能く來て呉れましたねね。何んなに待つて居ましたか』

と云つて眞佐子が嬉しさうに出迎へて呉れる、重なる苦勞の窶れが老の姿に顯然と見ゐて、花枝はこの老女に逢ふ毎に、すぐ亡母の面影を思ひ浮ふるのであつた、それがモウ自分の母となるのである、優しい手紙に引張られるやうにして、來は來たけれど有繫に恥かしい、其事は何も云はず俯向き勝にして居ると、眞佐子の方から口を切つた。

『手紙を見て呉れましたの』

『ハイ確かに……いろ〳〵とお有難うございます』

『あれ、其禮は妾の方から云ふ事です今度は唐突にあんな事を島さんからお話して定めて御迷惑でもあり餘り失禮の申分で、貴女惡く取つて下さりはせぬかと思つて妾大變心配して居ましたが、島様の御返詞では、貴女が早速に承諾をして下さつたと聞いて、妾モウ〳〵嬉しいやら有難いやらで、ツイあんな手紙を差し上げて』

花枝は自分に對して一々に詞を鄭寧にする眞佐子の意中を酌んで、胸が塞がる程切ない情に打たれた、それは、眞佐子が敬三の顔の創痕の爲に、妻として迎へる自分に對して、遠慮の心を有つて居るのが、いと痛ましう酌まれるからである、嘗て三味線提げて他人の門に立つた時、それを知つた亡母が泣いて悲しがつた事がある眞佐子もあの創痕が代られるものなら、命を縮めてもと思ふだらう。

『手紙に書いたのが妾の心です、他には何も……、水野さん、貴女敬三があんなの

でも、生涯面倒を見て遣つて下さるか』

思ひ入つたる尋ねの詞には、親の慈愛が深く籠る、花枝は漸く面を上げた、そしてモウ母と呼んで今の今から、この膝下に盡したい程孝行が爲たい。

『お母様……』

『おゝ、妾を母と……、妾を母として下さるか』

『妾も島様にお答へした外には、何も申上げる事はございません、……孤兒同前の妾……此方に參ることが出來ましたら……妾拾はれたのも同じ事でございます』

『イヽエそんな事はありません、貴女には眞島さんと云ふ立派なお父様が有る、假令表面緣が切れて居ても、時機さへ來れば又晴れて名乘合の出來る事がありませう及ばすながら今後は妾も其事には』

花枝は強い拒絕の色を現はして。

『イヱお母様、妾と眞島との關係を御承知でございましても、萬望其事は之から先

決して仰有らないで下さいませ。妾モウ全く他人でございますから……。これまではあんな非道な人と知つつても。誰ひとり親近とてもございませんし……母に安神させたいばつかりに、種々苦勞も致したのでございますが、モウ妾心强い者になつたのですもの、あの人達は妾や亡母の爲には恐しい仇敵です、妾敵を打たうとこそ思へ、父親なぞとは決して思はないのですから』

『でも肉親の緣は然う云ふ譯には』

『イエ妾あんな人達と他人ならこそ、此方へ參る事が出來るのですもの……お母樣妾お母樣の外には』

と見上る目には涙があつた、眞佐子は默つて花枝の手を握つた。

（一八）

日の光りが厚氷を溶かすやうに、花枝の胸の憂愁は、今日の眞佐子との會話で、拭ふが如く除り去られた。戀を遂げて夫婦となつた男女の仲にも、家庭事情と云ふ障害の爲に、思はぬ悲哀が起きる例は世間にいくらもある。それに自分は何といふ幸福であらうぞ。姑と仕へる眞佐子は、我を思ひ死に死んだ亡き母を其儘の優しさである。慈愛は苟日の詞にも、甘い泉を掬ふやうに、身にも心にも沁み渡るを覺へる。この心持は母に別れてから知らなかつた。それを懷かしみ物云はぬ墓石に、泣きに行つたことも幾度であつたらうお母樣喜んで下さい……妾に嬉しい幸福の日が來ましかと、花枝はそつと掌を合せて、いつも自分に付纏ふて居るやうに覺へる、亡母の靈に告げるのであつた。

『今日は話が長いですね。まだ琴は始まりませんか』

と云ひつゝ敬三が顏を出した。花枝は顏を眞紅にした。

『お入りなさい。茶を黄れませう。水野さんが四五日見ねなかつたもんだから、話

が山ほど溜つて居てね。今それを崩しに掛つてるところだよ』
　眞佐子は聲も姿も、今日は際立つて元氣ついて居る。スグ其前に坐つて、何か密々話を交して居た花枝の樣子にも何處やらにそは〳〵と落つかぬ氣勢が見ゑた。それに氣附いたか何うか、敬三はまだ襖に手を添へたまゝで佇立て居た。
『お母樣の茶は暫時禁物です。あれを飮ると、夜が苦しいです、寢られないのが一層目が冴へて來ます、それよりか花枝さんの琴を聽かせて貰つた方が有難いです、矢張音樂は精神を鎭めるに好いですね』
『あら、それでは茶は耻を掛かされたね、では此菓子も引込めませう』
　と眞佐子は笑つた。
『イエ菓子は喫るです、菓子を喫りながら、琴を聽かせて貰ひませうか』
『まあ卑しん坊のお客樣ね』
『ほゝほゝ』

　花枝も笑つた、難かしい顏の敬三も笑つた、笑ふ兩人を一つに眺めて、眞佐子は溶けるやうな顏で笑つた。
『ぢや菓子ばかり上げるからお坐んなさいよ』
『僕今物を書きかけて居ますから、方付て來ませう、何なら菓子を貰つて行きませうか、彼方で聞く方が一層好いですよ』
『まあ本統に我儘の聞き人ねゑ』
『だつて總て音樂は左樣です、花枝さんの琴を初めて聞いた時も、そら、あの時の入り口の垣の外でしたらう。あの時は磯千鳥だつた、ねゑ花枝さん、左樣でしたらう』
『ほゝほ、左樣でございました』
　と應へた花枝の聲は低かつた。……げに儘ならぬ世の中を、何にたとへん飛鳥川……昨日の淵はけふの瀨の。歌の文句は悲しいが、嬉しい緣の端となつた、磯千鳥

の曲は永久は忘れられぬ。

(一九)

調音に情の現はるゝものならばと、此日の彈琴は花枝に辛かつた、一曲を終ると毎時の通り茶が出て話に爲る順序であるが、心と心を照し合つて、眞實の母子のやうな親愛に繋がれた眞佐子と花枝の間には、モウ從前通の世間話では寂しかつた。默つて茶事に對ひ合つた兩人は、茶よりも甘い愉快な氣分を小さな茶碗に滴る香氣の佳い名汁の如く味はうた。

敬三は菓子を喫べながら琴を聞いたのだらう、書きかけの物があると云つて書齋に入つた限出て來ない、花枝にはこれが、茶にお菓子が添はない位の、物足らなさに思はれぬことは無かつた、併し之は今日に始まつた事では無い、好きと云ふ琴曲

を敬三は花枝の傍で聞いたことは一度もありはしない、それは總て音曲は間隔を置いて聽く方が趣味が一層だと云つた、あの最前の持說の實行かも知れぬ、それにしても花枝には、初の間には其方が願ふても無く有難かつたが、度重なるに連れ戲談口の一つも聞くやうになるにつれ、矢張眞佐子の傍に敬三が居て吳れて欲しかつた眞佐子は音曲に總明な理解を有つて居る、それで利益になる批評が度々出る、敬三も好きな道とて種々と話はするが、それはいつも彈奏が濟んで茶になつてからの事である、それを此頃になつて漸くに花枝は物足らぬことに思ひ出したのは、何うい ふ理由だか自身にも解らなかつた。

今度の緣談に就て、敬三が何う云ふ態度で居るか、それは花枝には判らぬのである、御堀の詞に依ると、敬三は顏の創痕の爲に精神まで病的に爲つて居る、それで總ての婦人を呪ふ心には、自分に暖かい愛情を運ぶ者があらうなぞとは夢にも信せぬのである、だから今度の緣談もいよ〳〵實行の時に至るまでは、花枝の事を本人

に漏すまいと思ふと云つた、花枝にとつては不安でない事は無い、これが深切な御堀の媒分で無かつたら此の事のみにも彼は躊躇したかも知れぬのである、そんなのだから一切を任せると云つた今日、自分の事はモウ敬三が知つて居るのであらうかそれともまだ何も覺らないで唯琴を聞かせに來る女師匠とのみ思つて居るのであらうか、琴の音を物を隔てゝ聞く敬三に、萬一やそれよりも酷い隔意があつたら何うしやうか。

出て來ない人を心で審なりがら、唯それのみを不足にして茶を服して居ると眞佐子はやがて其事を云ひ出した。

『島樣も先刻呼びにやつたので、モウ直に來て下さると思ひますが、何分敬三があの通り變人になつて了つて居るのですから、妾からは貴女の事も決して云つては可けない、すべて自分に任せるやうにと仰有つて……斯んな內輪の事まで打明けてお話したら、貴女が感情を惡く爲しはせぬかと思つたのですけれど、島樣には別に考へが有るからと云つて』

『イヱ妾……妾は只……妾のやうな者には迚も……』

と、斯う答へる外は知らなかつた。

『水野さん、琴が濟んだら話しに入らつしやい。貴女に質ねて見たい事がある』

と突然敬三が書齋から聲をかけた。

『貴女の琴を聞くと、いつでも其後はあゝして氣分が快くなるのですよ、以前は常時もあれでしたがね』

『參りましても……』

『病人の相手になる氣で、暫時遊んで下さいよ、書齋には島樣の外には滅多に誰も入れないのです。今日は餘つ程……何か貴女に質ねたいつて？ほゝほ、何んな事を云ひ出しても、貴女默つて聞いてゝ下さいよ』

（二〇）

來いと云はれて初めて入る書齋の。其處の閾は何だか花枝には越ね難くかつた、敬三は札の前に坐つて、團扇を片手に此方を見て居た。

『お入りなさい、まだ菓子が殘つて居ます』

と色氣の無いのは詞ばかりぢや無い、玻璃鉢に盛られた葛餅を指に捻んで、口へ持つて行かけて花枝にも勸める。

『ほゝほ 妾 彼方で澤山戴きましたから』

『モウ可けないですか、はゝはゝゝ遠慮する事はありませんよ』

と頰張る、小供のやうな態が花枝には可笑しかつた、自分が胸に有つ思ひの爲に自と身體に溢るゝ恥かしさと極り惡さの情に、正面は其人を見るのを辛い位なのに

引かへて、對手の葛餅を口一ぱいにした態は暢氣にも見ね羨ましくもあつた、がそれと同時に、男と云ふ者の、確かりとした强さ……感情を自在に制御する力のある賴もしさが感じられもする、戀は型の儘になる葛餅のやうなものだらう。

唯今お母樣……あの彼方でお願ひしたのでございますが、妾この表紙に名前を書いて戴きたいと存じまして』

古い琴歌の本を綴り直した一册を前に出す、花枝の持品を眞佐子が直しに遣つたのである。

『表紙を書くんですか、僕よりも斯な物は母の方が可いのだが。あのコテコテしたお家流の方が映りが可いのだけれど』

『あの……貴郞にお願ひ申せと仰有つて』

「はゝは、ぢや書きませう、前には何としてあつたですな」

と手に取り上げて。

『却々澤山有るものすね、でナル程歌の林か、これが表題ですね』
無雜作に筆を運ばせる。
『はゝはゝゝ字が伏せイの姿勢だ、寢てるやうですね』
『ほゝほ結構ですわ』
と花枝も覗き込む。
『それから名前か』
と云ひつゝ、さつと筆を落して龍の字を半ば書いた。
『アッ失敗つた、此奴ア豪い事をやつた。之は貴女の本でしたねわ』
水野と記すところへ我家の姓を書きかけたのである、龍の字は躍らんばかりの筆勢で、編ばかり濃く墨汁が匂ふ。
『イヱあの構ひませんわ、左樣して置いて戴いて……』
『だつて貴女の本へ僕の家の名を書いちや可かん。冒認罪になりさうだ、はゝはゝ

ゝ此奴ア大失敗だつた。斯うつと……消ねんか知ら』
と厚い鳥子紙に浸み込む半出來の龍の字を呆れた顏で眺める。
『本統に構ひません……あの……其本は貴家へ置くのですから、左樣書いて置いて下さいませ。その方があの……何ですから……』
『龍岡と書くのですか、だつて龍岡花枝とは書けませんね』
『あら』
花枝は顏を眞赤にした、敬三はその顏は見もしないで、モウ乾いて了つた不具の文字に、手のつけやうが無いのを當惑して居る。

(二一)

誤つて記された龍岡の文字の下へ、自分の花枝の名を書き續けることが、何の奇

も無い當然である日は何時か、花枝は此一寸した偶然の可笑しな事件を斯考へながら胸を轟かした。萬一か偶然で無く、敬三に故意あつて、筆の諧謔を爲たのであつたら。自分は進んで既に堅い決心を直接に語らうものをとさへ思つた。一旦人に漏らした心の秘密を、貫かんとする意地……勇氣は、丈夫の如き勇氣を處女に與へる。

敬三は花枝の胸にそんな大騷ぎが持上つて居やうとは知らぬ。目の前の問題は書き誤りの字の始末である、ふでを擱いて。

『之は可かん。これは表紙を取換へさせませう。暫時置いといて下さい。構はんですか』

『構ひませんですとも。その儘で結構でございますわ』

『飛んだ失敗だつた、僕何も此頃頭腦が良くないですよ、斯な失策を時々遣る』

敬三は左も自分を嘲るやうに云つて、冷たい微笑を唇邊に浮べた。

『あの御隱居樣が絶ねず御心配のやうに伺ひますが、まだ御氣分は以前のやうには』

『僕ですか、はゝはゝゝゝ之は生きて居ちやア癒りつこはありません。命が亡くなる時が即ち回復でせう』

『まあ、あんな事を仰有つて、矢張御保養が第一でございませう』

『保養ですか、保養で癒るやうな優しい病氣なら可いですが、僕のは此顏の創痕と同じやうに、肉を破つて骨に喰ひ入つてる、因業な病氣ですからな』

敬三が斯なに打解けて話しをするのは花枝には始めてゞある。創痕の事は此方から云出しやうも無く、元よりそんな機會とても無つた。眞佐子に向つては、同情の眞ごゝろから、老たる人の憂愁を拂ふべく、詞を盡して慰めもしたが。敬三との對話に創痕の事は之が初めてである、語る本人よりも聞く方がパッとして、この辛いことを云はせるやうに自分の詞が餘儀なく仕向けたのではあるまいかと、氣の毒さに

其顔も見られなかつた。默つて居ては濟まぬ……之を慰めるべく、自分の第一着の仕事は定められてあるのでは無いか。夫と仕へる時が來たら、創痕が原因たる精神の病は、吃度自分の力で癒して見せる。これが動かぬ覺悟である、その心の端なりと、漏すは今と氣は焦つたが、さて云ひ出す詞は難かしい。

『……そんな事はございませんわ、そのお顏の創傷は……それこそ貴郎の御名譽ちやございませんか』

『僕の爲には名譽の創傷で、他人から見れば鬼か惡魔か……酷い不具者の典型でせうな』

敬三の聲は漸く激しくなつたが、花枝は次第に心を冷靜に引締めることが出來た此對話の自分にとつて得難い機會である事を思つて、勇氣を起して我所存を告げやうとした。

『貴郎をそんなに見る人がございましたら、妾その人こそ不具者だらうと思ひますわ

花枝さん』

敬三は瞬きもしないで顏を見る』

『僕貴女に質ねたい事があつた、それは此創傷の事ですがね　貴女は嘘僞を云ひ得ない人と思つたから、僕貴女達女性の心理に就て、敎へて貰ひたい事があるのです貴女は僞らず飾らず、僕の問ひに答へて呉れませんか』

『妾嘘僞を申し上げる事は出來ません』

『有難う、何他事ぢや無いですがね、この化け者見たいな僕に妻を迎へろと云つて勸めるのです、それはあの島ですよ』

噂の主の島御堀は、襖の外で飛出す機會を、躍り上る興味で待構へて居る。

【三】

敬三は自分に關した重大な事柄を、全然他人事のやうに。さら〳〵と云つた、結婚といふ華やかな、人の世の春に唯一たびの麗しい、色彩に滿つる甘い快樂を、彼は枯れ切つた心で冷やかに見るのである、花嫁の榮の冠の綿帽子を墓場に點る白張提灯の色と同じ位に視やうとする彼は、自分に對つて、神聖な戀を捧げる女がある有つたら何うすると云つた御堀の詞を、矢張り呪はるゝもの〻やうに僻んで聞いたのであらう。

花枝は此方から切り出さうとした機先を　敬三に云はれて折角落ついた心が又騷ぐ『島が結婚を勸めるですよ』と云つた、其後は自分の事ではあるまいか？、それにしても質ねたいと云ふ女性の心理とは？。

『花枝さん、一體婦人といふ者の一般の嗜好ですね、……趣味とも云へませう、それは多く同じ傾向のやうですが何うでせう』

『同じだと仰有ると？』

『僕は左樣信じるですが、何うでせうそれは勿論廣い意味でゞすよ、敎育だとか境遇だとかで、多少の相違はあるでせうが、それは多く所謂虛飾と云ふ奴がある爲に美しくも立派にも、種々の嗜好趣味があるやうに見ゆるのであつて、煎ち詰めるとですねえ』

眞面目な顏を急に崩して。

『貴女の前だが、多くの婦人は矢張芝居蒟蒻芋章魚南瓜、之がまあ一般共通の普遍趣味でせうな』

と云つて笑つた。

『ほゝほ左樣でございませうか』

『之は戯談ですがね。恰度左樣云ふ風に、婦人の趣味は多くの塲合に一致すると思ふです、男であつて見れば譬へて云へばこゝに種々の色があるとします、その白を好む者、或は黑、または紫を愛する者と、男子の好みは差別が多いやうですが婦人に向つて色の撰擇を爲せると云ひ合したやうに强烈な赤、または赤色を原色にしたものを好む……斯う云ふ傾向のある事は爭れないでせうね』

花枝には、何故敬三が斯んな事を云ひ出すかゞ怪しまれた、で只頷いて聞くの外は無かつた。

多くの塲合に刺戟の强い赤を好む婦人は、赤ン坊が赤い色の玩具を歡迎すると同じ理屈で、其の思想が極めて幼稚で單純で、唯一時の目を喜ばせる事を考へる外に何の理解も有たない。とまあ云へない事は無いでせうね』

婦人攻擊の鋒先は漸々露骨に爲つて來る。

『妾には難かしい事は解りませんけれど、それは女人だつて矢張十人十色だらうと思ひますわ』

『十人十色？、趣味の相違があると云はれるのですか』

『只今のお話の色でもですわ、それは十人が九人までは女は赤い美しい色[illegible]したものでせうけれど、又一人位は地味な黑だとか奥床しい紫で無ければ厭とい[illegible]女があるだらうと思ひますわ』

『はゝはゝゝ島の所謂唯一人の薊を愛する人か』

と花枝には通じぬ事を云つて。

『併し其婦人は僞善者でせうせう』

『エ』

『女性に生質の嗜好を僞つて、媚びを賣る卑しむべき人間ぢや無いでせうか』

『花枝は覺ねず前へ出た、自分を罵られたやうに感じたからである。

『僕は實驗から得たのですよ』

『敬三は花枝が何か云はうとするのに押被せて、滅多に口外せぬ、骨に刻した怨恨を漏した。

『貴女には異母妹になると云ふあの眞島喬子ですね、彼女は僕と婚約があつて、僕が戰地で負傷した當時、この負傷の事を云つてやつた手紙の返詞に……貴女だから漏らす……。貴女は女々しいと云つて笑ふ人ぢやあるまいと思ふから、その時の手紙の返事に、有ゆる慰藉の詞を書きつらねた末、幹を裂かれた痛ましい梅の樹に、一脈の命が通ふて美しい花の咲くのを見る……妾は貴郎の御負傷に對して、此梅の花に對する尊敬と愛情を捧げる……、之が喬子の手紙の文句だつたです、それが何うです一たび僕の此姿を見るや、彼は忽ちに變心して……、イヤ變心ぢやなくて、彼は女性の本然に復つて、今までの虛僞の化けの皮を脫いで了ひ……』

『貴郎一寸〳〵一寸お待ちなすつて……』

『花枝はこれ以上を聞く痛ましさに堪へられなかつた。

『喬子は父親と一緒に……人間の皮着た畜生です……恐ろしい惡魔です」

『イヤ僕には左樣は思はれません、喬子の爲た行爲が、あれが女性の本然で、即ち僕の醜い姿に對して愛想を盡かすのは決して喬子ばかりぢや無い、一般婦人に通有の趣味を呪ふやうな、僕自体が大に反省すべきである事を覺つたのです、花枝さんこの僕の考へが間違つて居るか、女性たる貴女の僞りならぬ審判が乞ひたいと思ふですよ』

花枝は少時の猶豫もしなかつた。

『それは妾は間違ひと思ひます』

「僕が間違つて居ると云ひますか」

『間違ひだ、大間違ひだ。審判は最終ぢや。默つて服從すべし」

聲をかけて現はれたのは、花枝に嬉しい巨きな姿。

「おゝ島君」

『おゝ貴郎』

『審判者即ち立證者ぢや。龍岡ッ、十人……ぢや無い千万人の中の唯一人はこの水野花枝さんぢや。天は君を幸福にする爲に喬子を斥けてこの花枝さんを授けたのぢや、何うぢや、獨身主義を抛つ事弊履を捨つるが如く容易ぢやらうはッはゝゝ』

敬三は呆れ惑ひ花枝は知つて居て周章へた。それらに委細構はず御堀は命令の如く云つて。

『龍岡ッ、手を握れ。花枝さんと夫婦の手を握れッ』

〈二三〉

敬三や花枝を中心にして、眞心を盡すに努める事を己が快樂とした人達が寄合ふ

て、誠實といふ基臺の上に美しい事業を作り上げて居る一方、利慾の餌に集つて網を忘れた魚のやうに、危い境地を覺らない連中は、唐津夏彦に眞島父娘、それから夏彦の父の昌弘も群に漏れなかつた。この人々が自分本位に、計畧を爭ひつゝ流す油汗は、九分通まで事件を運ばせたのである。

喬子は彼の夜から唐津家に留まつて居る。疑ぐと不安に精神を疲らせて居る彼はまだ公然の式を擧げたのでも無く、まことに變な輿入れの、舅たる昌弘や其邸に仕へる人達に對して、極り惡い思ひの夥しいこと、それらは一切念頭に置かないで、夏彦と情交がありさうに見ねてならぬ初瀬菊枝の許を去つて、遂に自分が住むべき夫の家に來て居ることを、何より嬉しく安心に思ふた、父母が何と云はうとも、モウ此邸を動きさへせねば可い、例令菊枝が夏彦と怪しからうとも、此邸に居て夫を離さず警戒すれば可い、と度胸を決めて男爵家の奧に隱れて居る。さうして夏彦が父母の許から善い消息を齎せて來るのを時刻を繰るやうにして待つのである。

夏彥はちよい〳〵顔を見た。其の度に同じ事を云つた、浩造の結婚を承諾したけれども、自分の父の感情を善くする手段として、此の際浩造に頼み込んだ五萬圓の金を、自分の手から父に渡し、それに兩人の土產の意味を含ませて置きたい、すれば邸の平和と共に、兩人の爲めに、晴れて目出度い結婚式を擧げる時は、直ぐ來ると云ふ意味を、何度となく說いた。喬子は生みの父よりも、斯うなれば昌弘が大切である。昌弘の感情さへ和げれば、自分は忽ち男爵夫人である。貧乏の華族よりも富豪の平民が可い、と云つた父の頭腦は、新しいやうで賢くは無い、財產は夫の働きで作られやう、自分の爲には五本の指に悉く寶石環をはめるよりも、男爵の奥樣と崇めらるゝ方が何ぼう光り榮ゑがするかも知れぬ。何百萬の富豪と羨まる？父が漸と赤十字の徽章を胸にかけて、內證では父の債務者である某子爵某男爵が、大禮服美々しく馬車や自動車から現はれ出る姿に、土下座をせんばかりに敬意を拂ふ狀を、能く園遊會なぞで目擊る度びに、その味氣ない平民振が情なくて堪へられなか

つた、着るに餙るにうむほどの贅を盡しても、遂に及ばぬ緋の袴に、古典的の貴人の裝ひした、雲井に近い風俗は　切ない憧憬の的であつた。

世に時めく軍人の妻とならうと志 たのも、一つはそれらに對する反抗も手傳ひしたのである。それが最初の羨望を滿足させる事が出來るやうに。夏彥と今の關係になつたのであるから、此地位を失ふまいと努めるには、實家の財產位犧牲にしてもといふ、浩造に聞かせたら眼も眩はしさうな、眞鳥家の大叛逆者たるべき心掛けを抱いてゐる、それを絶ゑず神經的に鞭ち昂奮させるのは、すでに夏彥の胤を宿した普通ならぬ身であると云ふことである。僅た五萬圓の金で結婚式に澁滯が出來てるのなら、自分が歸つて父の金庫の鍵を奪つて來うか、とまで喬子は非常手段をさへ考へて居るのだつた。

昌弘には一度逢つたばかりで、邸內の樣子は一切判らぬ、發表まではナル可く目立たぬやうとの夏彥の注意に、當がはれた奧まつた八疊の室の、蓮池に臨んだ座敷に

憚る如く起臥して居る、

女中が食膳を運ぶ時の外は口を開くことも無い、曉方の蓮の音に目覺めて寢くたれ髪で欄に倚る時、父母よりも夏彦の事ばかり思ふた。

（三四）

喬子が唐津家の奥座敷で、体の好い幽閉のやうな日暮しを爲て居て、毎日の徒然に庭の蓮池を眺めて、思ひ切り開く花の數を讀むのにも、自分に待たるる樂しい日の思ひを寄せて居た、その十日ばかりの間に、夏彦は喬子の父浩造に對して、嘗て昌弘に約した如く眞島家の金庫の鍵を、自分の掌中に握り得る程の優勝の地位、強者の地歩を占める事に向つて奮闘を續けたのである。

流石の浩造も喬子の家出には青くなつて居る、そこへ附込んで此方の謀計を行ふべく、金に饑ゑて居る父を誘ふて酷い狂言を作いた夏彦は、案の定、浩造が娘を尋ね探して遂に兜を脱いで、昌弘に對つて五萬圓を出すと云つた、それを悉く自分の懷中へ收めたいが大目的である、此手段として喬子を父の邸へ隱したのである、隱す事に加擔した昌弘、隱れる事に同意した喬子は、欺瞞の天秤棒で擔がれた兩方の荷物である、之を何處まで運んで行つて、何ういふ風に所置するかは、息杖の役どこに居る初瀨菊枝のお玉と、夏彦自身の外は誰も知つた者は無い。

『罪なくして配所の月を見る体だね、喬子さんには氣の毒だつた、併し到頭お父樣を此方の者にしたよ。喜んで下さい、實は今日まで貴女の行衛が知れない事にしてあつたのだ、でお父樣は躍起になつて探す、私の方へ轉で來なければならぬやうにしてあるから、斯うなると金よりは貴女が可愛かつたのだね、例の五萬圓をいよいよ出さうと云ひ出したのだ、ところが矢張商人だね、算盤の合はぬ事は此塲になつても爲ない、私が貴女を確實に保護して居る、と云ふ事が判つたら、右の金と一緒

に婚禮の支度萬端スグ此方へ送らうと云ふのだ、其處には私を疑ふて居られることが能く見ゐてるが、要之お互の大勝利さ、こゝで私が、此通り貴女を保護して居りますとさへ云つて、安心を爲せればそれで一段落、次には親父の喜ぶ顏を後に、兩人でお待兼の新婚旅行に上る仕事が殘つてるばかりだ』

夏彦がニコ〳〵して歸つて來て、此報告をした。兩人で威嚇した事が豫期の如くに功を奏し、父が我を折つて慾を捨て、五萬圓を出すと共に結婚を承諾したと聞いて、喬子は父に同情は爲ずに夏彦に感謝した、以前の詞と撞着のあることなぞ此際の喬子にはモウ氣着かないで居た。

『ところで茲に一つ相談がありますがね、私は明日にでもお父樣を連れて來て、貴女に逢はせて安神を爲せる、其事は可いですが、困つたのは今の五萬圓です、父がね』

と云つて夏彦は急に當惑の顏をした。

『父の方に五萬圓、金が急に要用があると云ふのです、それで、お父樣は父に對つて、何時でもそれは用立ると云はれたから、私に金を受取つて來い、と斯う云ふのです、けれども私は今云つた如く、貴女をこゝに保護して居ることを先づお父樣に見せなければならぬ、それが順序ですからね、私達の目的は結婚にあるのだから、金の事を無暗に云つて、折角こゝまで濟ぎつけて又お父樣の感情を害しちやあならんけれども私の父の感情と云ふ事も之は私よりも貴女に取つて、イヤお互がこれから作つて行く理想の家庭の平和上、顧みないといふ譯に行かんものですからね、喬子さん、何うでせう、貴女斯うして下さらんか、貴女がお父樣に宛てゝす、其五萬圓の金を直に私に渡して下さるやうに、それで無いと、父の感情を害する事が、貴女の爲に非常の苦痛である、と云つた風にです、そこを巧く書いてね、何でも可いから金を渡して父に安神さへ爲すれば、それからは此邸は私と貴女との世界になるのだから』

喬子は一も二も無く頷いた。

『妾何どでも書きますわ、戰々して居るんだもの、金スグ出させてよ』

（二一五）

喬子の姿が何處かへ消ねて了つた後の眞島家は　宛で火の消ねたやうで、喪に閉ちた家と同じ陰氣さが奥にも表にも滿ちた、浩造は毎日店へ顔を出しては居るが、それは身体ばかり運ぶので心は可愛い娘の後を追ひ廻して居る。

母の元子は病氣同樣になつて、醫者よりも藥よりも、これは喬子が生きて居る事を知るまでは又起ちさうもない樣子である、夫婦の哀傷がこの沈み切つた家内の光景をつくつて居るのではあるが、一つには眞島家の榮華は喬子が代表して居て、及ぶ限りの贅に身体を輝かせてあつた、其姿が突然掻消ねたのだから、花を拔いた植木鉢と云はうか、掛軸の無い床の間を見るやうに、大きな物足らなさが出入の人まで寂しがらせた。

喬子の行衛は浩造には見當がついて居る、夏彦の許へ走つたといふ事は明らかであるが、夏彦もそれ以來絶ねて姿を見せぬ。男爵家へ交渉の爲に浩造自身が行くと昌弘も驚いて共々探し求めやうと云ふ　畧隠れ場所も方角がついてるやうな話振であるから、一先安神はしたものゝ、一日々々と安否の知れぬ時間が經つに從ひ、夫婦の心に際限なく脅かされる。大川尻の水に浮く女……、噴火口の情死、といふやうな新聞記事を見ると、元子は青い顔や黒焦げの身体が、それが喬子に違ひないと想像して、泣き叫んで夫に逼る。

『そんな事を云つたつて、俺が爲た事ぢや無し。これ程手分けをして探して居るのだから、知れるのを待つより詮術が無いぢやないか』

『知れた時に屍骸になつてたら貴郎は何します』

『さあそれも俺が爲た事ぢや……』

『イ、エ貴郎が爲たも同樣です。あんな事を云はないで、早く唐津樣に嫁入さへすれば、決して斯な事になるのぢやありません　貴郎が僅かの金を惜しんで、因業な事を仰有るものだから、喬子だつて可愛相に』

『俺も斯な事になると知つたら、止めるのでは無かつたけれど、それも喬子が可愛いと思へばこそぢや無いか』

『可愛いのが眞實なら、生きてる間に早く探し出して、連れて歸つて下さいよ、喬子に萬一もの兇變があつたら妾生きては居ませんから、左樣思つて下さい』

『左樣云ふたら俺は何も爲らんが、夏彥樣の所へ行つてるに違ひないのだけれど』

『その夏彥樣が知れないのぢやありませんか』

『今日あたり、唐津樣の方から何とか消息がある筈ぢやが、お前のやうにそんな極端な事を考へんかて、死ぬやうな事は滅多に無いと俺は思ふ。夏彥樣が随いて居てそんな馬鹿な事させは爲まいぢや無いか』

『だつて邸へ歸らうには、五萬圓の金の事でお父樣が面白くなし。喬子も宅へ歸つたら別れさせられるに極つてると思ひ詰めて居るのですから、兩人相談の上で何んな無分別を爲ぬとも限りません』

戀遂げぬ男女の情死？、それでは昌弘からも脅かされた。斯んな苦勞の日が續いたら、肥滿の身体が針のやうになるだらうと思はれた。

其日にも何の方面からも遂に何の吉左右も無かつた、唐津家からは善惡ともに探索の樣子を知らせる約束になつて居たが、それも待勞びれであつた。浩造は堪らず出掛けやうとして支度をしてる最中、取次の女中が倉皇と入つて來て。

『あの唐津樣がお越しでございます』

『おゝ來られたか。早く客室へお通し申せ』

女中は何も彼も能く事情を知つて居る喬子づきのお時であつた。

『あの若樣でございますよ』

『エッ夏彦さん？夏彦さんが來た？』

『飛び上るやうにして云つた。

『夏彦さん單獨かい。孃が居やせんか。孃を連れてぢや無いか』

『イエおひとりでございます。何だか大層御樣子が違ふやうでございますわ』

『早く此處へ、イヤ客室が可い……エエ何處でも構はん。早く通さぬか。待て〳〵俺が出るから、其方は此事を奧へ知らせて呉れ』

浩造はひとりで周章まくつた。

二六

不意に眞島の玄關へ姿を現はした夏彦は、一方ならぬ動搖の中に迎へられた。

喬子の家出に就ては、誰しも夏彦を疑ふて居たのであるから、それ以來音沙汰絕ねた本人が今日直接に訪ねて來やうとは想像にもつかん事であつた、死ぬの生るのと云つてた元子は寢床を飛出して、客間の次室で息を殺して居る、女中達は目を見合せて、盛んに此驚くべきお客樣を問題にした。

通された夏彦は泰然自若、案内のお時に調弄ひながら、腹では隨分と混亂つた策畧の段取りを考へて居る。

『何で私の顏を見て笑ふ？』

『ほゝほ、だつて若樣』

『何だ、だつてが何うしたい』

『ほゝほ、若樣つて、知らあん顏をして居らつしやるわ』

『知らん顏？、知つてるよ、暫時來なかつたつて、お前の顏を忘れるやうな浮氣者ぢや無い』

『知りませんよ、ほゝほゝゝ眞面目な顔をして、何故お孃樣と御一緒に入らつしやらないのでございます』

『はゝはゝゝゝ馬鹿な事を云つちや可かん、喬子さんの家出が妾を知つてると思つてるんだね、世間の奴等ア何と云つても構はんが、こゝの家の人達には誤解されたくなかつたの私關係無しさ』

『そんな事仰有つたつて、誰が信用するものですかよ、お孃樣づきの妾にぐらゐ、前に左樣仰有つて下すつたつて可いわ、本統に若樣つて酷い方よ、皆でお恨み申して居りますよ』

『戯談ぢや無い、これも左樣思つてるのかね』

と拇指を出した時、その浩造が入つて來た。

『甚だ御無沙汰しました』

『イエそんな事はモウ……それよりか若樣、あの喬子は何して居りますか、それを

早く聞せて下さい、モウ喬子で家中顚覆かへつて居ますよ』

混亂の詞は、威嚇の充分に利いた事を證明するのである、夏彦は今日の仕事が決して徒勞に終るまいと豫期して居る。

『若樣、早く喬子の樣子を……居所を仰有つて下さい、何處に何して居るか、それを早く……』

焦々と問ひかけ詰寄るのを、靜かに紙莨の灰を火皿に落して、欄間に消ゐる煙を眺める、落つき拂つた態は心憎い程である。

『イヤ今も其事を云つてたんですが、喬子さんの家出を、何か私が敎唆でもしたもゝやうに取られて居ると私非常に迷惑を感じますがね、それは私から申上げなくても既に御承知の通り、喬子さんと私とは成程約束はしました、夫婦約束は爲たですが、それには無論貴方の御承諾を乞ひ、お許しを得た上で結婚の手續きをする積だつたのです、痩せても枯れても私の身分は華族です、婚姻の形式に於ても、普通と

は異つて却々嚴かな規定があるのですから』

之では反對に喰つてかゝられさうだ、浩造は喬子の安否が一心である。

『若樣、モウ疑ふも疑はんも無い、貴方と私との間です、私も家内に內證の秘密でさへ貴方には打明る。喬子を差上げる事も、私から進んで爲た事ぢやから、それに何の斯のは毛頭ございません、唯私にも家內にも默々で、何も云はずに飛出した限生きてるか死んでるか全然音沙汰が無い、親の心子知らずと云つても、餘りな事を爲ると思つて……』

『はゝはゝゝそれは道理です、其御心配には同情しますがね、私が家出を勸めたものと誤解されると、私は自分の名譽の爲に辯解を爲なければなりませんからね、私は今度の事に就ては非常に苦しい位地に居ることを知つて居ます、それを忍んで喬子さんを保護して居たのは……』

『一寸……若樣、一寸……あの喬子は貴方の所に？』

『まあ左樣急かずに聞いて下さい、私が今日まで苦しい目をして、喬子さんに保護を加へて居たのは、要之眞島唐津兩家の名譽を思ひ、喬子さんの利益を思つたからです、私が保護しなかつたら、今頃は喬子さんは死んで了つて居るのですよ』

『エッ』

『今日私が喬子さんから托されて來た此の手紙も、或は遺書になるのかもしれなかつたですよ』

と云つて徐にポケットを探る。

（二七）

夏彦に對つて散々恨みも不足も云ひたいと思つてた浩造は、口も開かせないやうに乘しかゝつて、此方から謝禮を受取らねば還かぬやうな態度に出られたので煙に

巻かれて了つて目をパチクリさせる。其面前へ、之だつて遺書になるのだつたかも知れぬと、膽を冷りとさせて置いて取出したのは、喬子に書かせた父宛の手紙である。

『之を讀まれたら、今度の家出が私の勸めたもので無いと云ふ事は了解されませう私は實は此手紙を持つて來るのさへ好まなかつたのです。けれども斯んな大切な物を他人に托する譯に行かんと云つて、喬子さんの強ての頼みだから……、それに是非私に貴方に逢つて吳れ。其用件は此手紙で判ると云はれるものだから』

『では若様。喬子は無事で居るのですな。ヤレ〳〵それで私』

と云つて浩造は額やら鼻の頭に浸み出た汗を袂で粗暴に拭いた。

『若様の所へ行くなら行くと云つて出れば可いのに、詰らぬ心配を親に掛けるものだから』

と夏彥の手前を繕ふやうな譯の分らぬことをグド〳〵云ひながら、出された手紙

を廣げた。

『……妾は此手紙を夏彥様に托します。妾は家出の日に、自ら斷然とした命を夏彥様の爲に制められ、今は生きて甲斐なき身を、そのお方の許に留めて居ます。妾に自殺の決心をさせたのは父上です。父上は妾に生きて居るなといふ事を、表面は親の子に對する慈愛のやうに見せかけて、其實は卑しむべき金錢上の慾から割出して妾に逼られたではありませんか、妾がすでに普通で無い身といふことも知つて、それから夏彥様と別れない堅い決心を有つ事も知つていらつしやつて、それであの方との結婚を破壞することに全力を注がれたではありませんか。斯申上げたら父上は拒まれるでせうそれは親子の慈愛を裝ふあなたの僞善です、何故なれば、父上は今の妾の塲合に、恰も結納とも持參金とも見れば見らるゝ五萬圓の金、あれを唐津様に拒むことが、兩家の間に永遠の垣を築き、元より結婚なぞ思ひもよらぬ悲慘な結局になることを覺られぬ筈はありませんから、妾は餘り長く申上げますまい、こ

ゝで父上が熟考して下さつたら、妾を死の手から奪ひ返す唯一の方法は、自らお解りになるだらうと信じます、尤も其熟考の時間は、夏彦樣と父上と、此手紙を前に對話の時間がそれである事を御承知下さい、夏彦樣の手から五萬圓を受取り、それを第二の父上に妾より差上げることに依つて、妾に復活の運命が來るのです、あなたは眞の慈愛より妾を案じて下さるのなら、卽座に金ーモウ今は妾の生命の代價となつた五萬圓の金を、夏彦樣にお渡し下さいませ……』

浩造は手紙を讀む、夏彦は其顏色を讀む。庭園に鳴く油蟬の、暑さを酷がらせる音樂は、火でも降るやうに一しきり高くなる。

（二八）

京橋の中央銀行。

暑い眞盛りは大金庫の金も暫し午睡の夢に入るかと思はれて、宏壯な建物に出つ入りつの人影も寂しい、赤煉瓦の反射を受けて、美々しく輝く自動車が一臺留つて居る、先刻兩個の紳士を乘せて來たのである。

階上の來賓室に、卓子に中に向ひ合つてるのは、眞島浩造と唐津夏彦である夏彦が昨日喬子の手紙を持つて眞島の家を訪ふた、今日兩人で銀行へ來て居るのは、あの時の用向きに繋がつて居る事と思はれる、此の中央銀行は浩造が重役の關係があり且つ取引先なのである。

『これでまあ其方は濟んだと云ふものです、喬子の手紙を見ないでも此金を御用立ることとは、私チヤンと豫算に入れてあつたのですからな、其事は若樣から呉々も御前に何か……決して此金を出し惜しむの何のと』

『イヤ眞島さん、此金は昨日も云つた通り私は唯喬子さんの使ひであるのですからたゞ中間に位つ取次ぎに過ぎないのですから。金に關した事は、希くは貴方から喬

子さんに直接に仰有つて欲しいですね、之を私が受取るといふ事も、實は私は不快に堪へないのですが』

夏彦は五萬圓を受取つて鞄に提げて居る、其重味さへも厭な顔をして、屢この取次役の自分の本意で無い事を繰返すのであつた。

『それは父が此金の爲に焦眉の急を救はれるといふことは、子の私として貴方に向つて感謝しなければならぬ事です、併し之が妙な機會になつて、恰も私と喬子さんと結婚するに就て、貴方の金錢上の御援助を受ける事が條件となつた如き形があるこれは私には實に堪へられない苦痛ですがね、喬子さんの手紙が此金の事が主要であると知つたら、私は決して使ひに立つのぢや無かつたのです、喬子さんとしては父に對する義理合を重んぜられて、斯う云ふ事を貴方に逼つたのせうが、私としては之を辭退すべきが當然です

『若樣、モウ其事は云つこなし』

と浩造は手を振つた、云はるゝ度に五萬圓に籠つた未練が鎌首を持上げる、之を出さねば遺書になりさうな手紙を見て、黄金と生命と惜しむ彼も目を閉つて銀行へ連立つたのである。

『それよりか若樣、此金で御前の方の一件が埒明となる、若樣は御歸參が叶ふ、となるとスグ公然の式を擧げたいと心得ますが、お邸の御都合はいかゞでせうな、私の方は實は一日も早く運びたい、と云ふのは、喬子も可愛相ですが、一つには又世間体もな』

『大きに左樣です、喬子さんの手から此金を父に渡したいといふ希望ですから、其事が濟んだら一應私が喬子さんを連れて貴方の家へ届けませう其上でスグ改めて式を行ふといふことにしたら何うでせうか』

『それ、それ、若樣左樣願ひませう、支度萬端はあの通り以前から調へてあるのですからな、荷物は急にお届けする事にして、そんならいよ〳〵左樣と結着にします

せ』

浩造は手を拍つやうな格好をたし、其眉の邊りにはやれ〳〵といふ安心の色が見ゐた、五萬圓が出て行くのを思ひ切つた諦めか、娘可愛さの滿足か、昨日までの澁面を解いて、勝手の違つたやうな笑ひを湛へつゝ。

（二九）

之を受取つて喬子に渡す取次役さへも不快である本意で無いと云つた夏彥は浩造に別れると眞赤な舌を出し、五萬圓の鞄を抱へて目的の所へ駈つけた。

玉子は妾宅で待構へて居る、巧く行つたら五萬圓、現金を持つて來るから目を廻さないやうに、旅行の支度を爲て置けと云つた夏彥の詞に胸を轟かせて歸りを待つのである。五萬圓も有難いが、金さへ手に入ればそれ機會に喬子を捨てると云ふ約束が、玉子の爲めには一層嬉しいのである。裏面の見ゐた貧乏華族へ窮屈な思ひして夫人となつて乗込むよりも、金儲けの智慧に富んだ好きな男と、遠慮の無い世帶を持つのが賢いと分別をつけた玉子は、喬子に較べて元より斯道の苦勞人である。

夏彥は汗を拭き〳〵歸つて來た。座敷の中央へ放り出した重い鞄の音は、玉子の胸に涼しく響いた。

『貴郎巧く行つて？』

『さあ何うだか其鞄に問ふて見るが可い』

『入つてるの？』

『お約束通りさ』

『エ、五萬圓！』

『五萬圓も入つてるが、眞島浩造の執念も入つてる、それから親父が腰を拔かして膽を潰す。喬子がワッと云つて之は氣を取失ふね。そんなこんなの怨み辛みが、悉く五萬圓に粘り着いてゐるから恐ろしいよ』

戯談と知つても玉子は後を見られる氣がした。

『貴郎本統の事を云つて下さいよ、妾何んなに心配して待つて居たか』

『心配甲斐には此通り』

と夏彦は鞄を開いて　新紙幣の大束を景氣よく摑み上げて見せた。

『詳しい話は汽車か宿屋だ。愚圖々々してたら金の執念や怨念が捕まへに駈つける早く此家を消ねることだ』

『喬子さんは何うするの』

『何うするつて決つてるぢや無いか。置いてけぼりさ』

『だつて……』

『訝しいぢや無いか、それがお前の希望だらう。それともモウ俺が厭になつたと云ふのなら此五萬圓もろともに俺は邸へ帰つても可いよ、今なら大威張で勘當赦免だ』

『さうして喬子さんと御夫婦になるの！、それは可いわねね』

云ひさま鞄を取つて投げる、手も切れさうな新紙幣の束が、この際狭い場合の艶めかしい劇を、見物するやうにぞろりと顔を出す。

玉子は豫期した如く行つた事を喜ぶ心の奥に、流石に喬子に對する慘虐の行爲が振顧みられもするのであつた。

バタ〱に家を畳み、兩人は避暑する行樂の旅裝ひして、其日の夕方横濱行の汽車に乘つた。船で四國地の溫泉へ渡ると云ふのが夏彦の豫定であつた。

《三〇》

『君が歸つて來るとは意外だつたよ』

と久振りの友は懷しさうに顔を覗いた今船から上つたばかりの、洋服姿の若い男

は、棧橋で出會ふた稅關吏の制服着た、同年輩らしいのと話しながら步む。

『擲日驪の當時には皆が君達の事を大變心配してね』

『あゝ其節は御慰問狀を有難う』

『すると、君は日本人會で義勇兵の將校に推されたと云ふ事が傳はつたから、僕ら非常に嬉しかつたよ。まあ大した事にならなかつて可かつたが暴動でも起れば君の任務は實に愉快だつたねえ』

『イエ、あれは全く……迚も僕などが勤まりはしないのです、唯平時に例の運動皷吹をやつてたもんですからね。腕力でも强いやうに買被られたのですよはゝはゝゝ』

青年の笑ひは寂しかつた。其姿にも何となく寂しい影が絡はつて居る。

『そんな事は無いよ、君が上海在留の邦人中で、模範青年の尊敬を受けて居るといふことは、內地でも人が知つて居からね。歸ると云ふ事が判つてたら、大いに皆で

歡迎の準備をするんだつた。全く唐突だねえ。矢張商會の用かね』

『……イエ今度はホンの私用で……一寸……その何です、歸つて來たのですがね』

『左樣かね、併し君は實に羨ましいよ、お父樣はますく豪くなられる、君は早くから實業界に乘出し、海外で實地の研究を遂げる、眞島家は千秋萬歲だねえ』

『父が何と云はれるですか』

『お父樣の發展は素晴しいじやありませんか。モウ長者鑑に登錄されてるよ』

『そんな物が何の役に立つもんですか』

『役に立たぬ！、新歸朝者の口から驚いた事を云ふねえ、あのお父樣の富力を背景にして立つ君の、これからの舞臺を羨まぬ者は無いさ』

『人各自見る所を異にしますからね。僕は父の財產なぞ無關係ですよ』

『はゝはゝゝゝ戲談じや無い』

郵船の待合所前へ來ると、熱閙な町の夜景を飾る電燈が明るく輝き出した。海上

の滊笛は遠く近く、瞬く間の休息も無い、港の活動の呼吸の如くに鳴り響く。
『君船に醉つたのじや無いかね、大變血色も惡いし、それに元氣が無いやうだせ』
『左樣ですか……格別何とも無いですが』
稅關の制服は腕時計を見て立止る。
『僕入船の時間だから……何れお宅へ訪問しやう、暫時は滯るだらうね』
『それ……が一寸判りません……或はモウ行かないかも』
此時前方から並び合つて、此方へ來る夫婦者らしいのがある。派手な女の風俗が夕方の賑やかな人通りにも、混れずに人目を惹いた。靑年は見るともなく其男女を見て、忽ち顏の色を變へた。
『行かないかも知れぬつて、モウ君上海へは歸らないと云ふのかね』
正服が怪訝な顏をして問ひ返した時、港の關所の吏員を忙がしからせる入船の笛が恐ろしく大きく傳はつた。

『兎に角訪問するよ、失敬』
『あゝ失敬します』
と云つたが、靑年の眼は友の方は見なかつた。引つけらるゝやうに、今自分の傍をすれ〳〵に通つて、海岸の方へ步む男女の姿に注意した。
派手な裝ひした女は玉子、連れ立つのは唐津夏彥である兩人の姿はやがて棧橋に現はれる。それを後から隨けた靑年は、先刻船からこゝへ上つた眞島浩三郞……上海に居た喬子の……兄であつた。

（三一）

浩造から發けた電話が端緒になつて、眞島唐津兩家には大騷ぎが起つて居る浩造は渡す物を夏彥に渡したから、直ぐ婚禮の式を擧げたいと云ふ事を申込む。昌弘は

そんな金はまだ受取らぬ、夏彦も邸へ顏を見せぬと返事をする、さあ之が始まりで惑ひと疑ひが縱横十文字に縺れ合ひ、何が何だか五里霧中だ、五萬圓といふ問題を擔ぎ込んで大きな騷擾を初めたのである。

昌弘には婚禮よりも金が大事である。眞島家へ駈けつけやうとして邸を出るところへ、浩造の自動車が門に衝突るやうな速力で來た、兩人が双方から驚き競べを爲て居るところへ、喬子も堪らず俥を飛ばして歸つて來た、元子は泣くやら笑ふやら唯ひとりで情の儘を僞らず現はしたが、浩造も喬子も、それから昌弘も、三人は三樣の闘膽と策略の齟齬に、呆れ惑ひ悶へて居る　さうしてトゞの結局が、皆が一つに束ねられて、彦夏の爲に深いところへ投り込れたのでは無からうか、となる。青い顏を見合はせる中に、喬子は狂はんばかりに爲つた。

『妾夏彦さんを探して來ます』

と云つて駈け出さううとする、元子はもう離すことでは無い。

『お前が行たつて、夏彦さんが隱れる氣なら何して知れるものですか、そんな事を云つてお前又妾に心配を』

『イ・エ妾夏彦さんの居る所を知つて居ます、妾行つて』

と身を悶躁く、その詞で初瀨菊枝の宅が怪しいと判つて、直ぐ人を遣ると、モウ其處は誰も居ない空家となつて居る、家主を調べると、藝妓上りのお玉といふ女が圍はれて居たのが、昨日俄に何處かへ移轉したとの話である。

偖は？。喬子はいよ〳〵狂亂の体となつた、何處を當ともなく駈出さうとする遣るまいとする、昌弘は五萬圓の切齒をキリ〳〵鳴らす、沸騰する湯玉のやうに、人々の心が逆上きつたところへ、書生が周章まくつて入つて來た。

『あのお歸りでございます、お歸りで

『エッ夏彦が？』

と昌弘は起上つた、喬子の青い顏は赤くなつた。

「イエあの上海から」
「エッ浩三郎が〻?」
今度は浩造が起うとする、其處へ姿を現はしたのは、何の前觸れも無く、上海から歸つて來た浩三郎であつた。
「お父樣、お母樣、手紙で申上げて置きましたから、私不意に歸つて來た事にお驚きはありますまい」
直立の姿勢で明瞭と云ひ放つた聲……其姿には一座を壓へつけるやうな力があつた、斯云つて置いて、浩三郎はツカ〳〵と喬子の傍へ進んだ、其勢ひが烈しかつたので、元子は中を隔てるやうに手で制して割つて入る。
「お母樣ッ、その過つた慈愛の結果が今この醜態となつた事に、まだお氣がつかんのですかッ、情ないッ」
云ふが否や突き退け躍り蒐り、矢庭に妹の襟首引つかみ、そこに捻ぢ伏せ揉むやうに押へつけた。
「妹ッ、龍岡中尉に代つて、此兄が成敗をするから左樣思へッ」
大喝したが眼には涙があつた、振り上ぐる拳は骨肉の情に震へた。

（三二）

「御免下さい」
朝の涼風は秋の氣を帶びた。玄關の障子のピッタリと閉め切つてあるのにもモウ暑氣の後姿を見つけたやうな心地がする、虫の聲も微に聞へる。
「御免下さい」
龍岡家の玄關に立つて案内を乞ふ若者がある。二言三言聲をかけたが、一向人の出る氣勢が無かつた。

『不在！』

と若者は四邊を見廻した。長い旅の疲れに惱むやうな物憂さが、顔にも姿にも現はれて居る、着て居る白服にも塵埃と汗の汚れが見へた、萬一や標札の讀み違ひでは無いかを危む如く、若者は答への無い玄關から出て門の柱を見直した。

此時勝手口の方に大きな聲が聞へ、續いて人の出て來る様子である。若者は再び門内に入つた。

『そんな事は氣遣はんでも可い、大丈夫ぢや、龍岡には私がついて居る。花枝さんには母堂が隨き切りぢやからな、滅多に油斷は無い、安神して留守番を頼むよ』

話しながら出て來たのは、島御堀と藤吉であつた。

『それで旦那。敬様も奥様も創痕は何ないでございますだ、俺そればかり心配でなんねへだから』

『それも大丈夫ぢや。モウ十日も經つたら退院が出來ると、院長が請合つたのだからな。龍岡が昔通の立派な顔になつて歸つて來るのを、樂みにして待つてるが可いよ』

藤吉はモウ嬉しさの張切れるやうな顔をした。

『敬様のあの創傷が傷跡も無いやうになるだつて、俺嘘のやうに思はれて』

と云ひつゝ玄關に佇む人影に氣付いた。

『はれお客様だア。島の旦那、一寸待つて下せいや』

藤吉は急いで應接に行く。何か詞を交して居たが客を振顧ながら御堀の所へ來て。

『旦那、妙なお客が來たゞよ。ツイぞ見た事の無へ人だがね。敬様も御隱居も皆お留在だつて斷ると、彼所に居らつしやるのは島様さいふ方で無へかつて。お前様を見てね、是非お前様にでも逢ひていと云ふだ』

『御堀は小首を傾けた。

『何と云ふんだい』

『それが、名前はお前樣に逢つた上でと云ふだ、無心者でも無ゐらしいが』

『誰か龍岡の知人が見舞に來たんだらう、私が會はう』

と云つて御堀は其人に近づいた。

『ヤあ』

と例の快濶な調子で。

『こゝの家は皆不在ですがね。何か御用なら私聞きませう、まあお上んなさい』

『有難う、突然に伺つて……』

と若者は丁寧に頭を下げた、玄關の次の間へ導いて。

『宛で空家同然だ、まあお敷きなさいオイ爺さん莨盆だ……と云ふと自分の家のやうだが、私は當家の者ぢやないはゝ……』

『貴下は島樣でせう』

『私を知つてる君は何誰だつたかねえ』

『前に自分の名前を申上ぐるのが當然ですが、私は名を云つては、御當家の門を潜る事の出來ない者ですから……』

『名を云つては、訝しいぢやないか君は龍岡と知合の方ぢやありませんか』

『ハイ龍岡さんとは知合……と云ふよりも……御當家の爲には、惛むべき仇敵たる身分の私共です』

『仇敵！』

御堀は若者の顏を凝視た、その鋭い視線に堪へられぬものゝやうに、疊に手を突いて頭を低く。

『私は眞島浩造の悴浩三郎と云ふ者でんす。私今日謝罪の爲に參りました』

『ナニ眞島ッ』

御堀の濃い髯は一本づゝ動くかと思はれた。

『當家は神聖な帝國軍人の住居ぢや君達不潔な動物が來る所ぢや無い。歸れッ』

叱咤と共に起上るを、浩三郎は取縋つて袂を捉へた。

《三三》

御堀は眞島と聞いて何事を考へる餘裕も無かつた、唯赫とばかり怒氣滿身、歸れッと大喝して其の塲を去らうとした、人道の敵として彼が眞島浩造を惡むの情は、其邸の方角へも足を近けぬやうにした、正義を愛すること劍を愛するが如き軍人氣質の彼は、眞島の名を耳にするさへ耳の穢れを覺めるのであつた、まして浩造の子で喬子の兄たる浩三郎の來訪は、例令それが何の用向きであらうとも、初めから面會を許すべきで無い。一歩、此龍岡の家へ彼等の足を容れさすべきでない、と烈しい憎惡の念を涌立たせて居る、捉へられた袂を引斷り、支ゆる手を打碎いても、不

快極まる對象から身を避けやうとして、憤然として突立つた。

『其御立腹は道理です。私は妹に代つて、龍岡さんなり貴下から、何んな制裁でも受ける覺悟で參つたのです』

『妹に代る?、卑怯な事を云ふな、罪を妹にのみ被せて親や兄は免れやうとするのかッ』

『イエ決して左樣ぢやありません、私は……』

『辯解するなッ、親として子を監督し兄として妹を保護する事の出來ぬ……そんな不紀律の家庭から喬子のやうな奴が出るのは當然ぢや、喬子は取るに足らぬ一婦人ぢや、汝、妹に代ると云はず、何故已れ自身の罪を謝さんのぢや―』

睡吐きかけん權幕で睨みつけたが。

『イヤ謝つても悔ても、汝一家の罪は消ゐるものぢやない。天定つて人に勝つ時が來る、其時に汝一家が人に與へた慘虐な苦痛が、どれ位ゐ酷たらしいものであつた

かを能く味はふが可い」

　浩三郎は袂取る手を震はせて。

『その罪を知る時は旣に來ました、父にも母にも妹にも……この私にも、眞島の家には當然の神の宣告がすでに下つて居るのです、此事をお知らせした上、せめてもの贖罪の道を立る爲に、私ひとり今度の父や妹の爲た事に全く無關係であるのを、身の潔白として斯うして伺つたのです、耻辱を忍んで參つたのです、御立腹は道理ですが、私申上げる事を、一應お聞き取りが願ひたいのです』

『無關係？とは知らなかつたと云ふのか……』

『ハイ、知らぬとは兄として云へない事ですが……親の罪惡を擧げるのは忍びませんけれど、島樣、萬望私の身に御同情下さい』

　詞と共に淚は流れて寂しい若者の顏を濡らした。

『私はズッと以前から外國に參つて居たのです、上海で商業の實務を見習つて居た

のです、すると此頃になつて父から突然、妹と龍岡中尉の婚約は取消し、改めて或華族へ嫁入らせると云ふ手紙です、私は之を見て　實に倒れんばかりに驚いたのです、妹と龍岡中尉との結婚には、私は大賛成をして、この立派な人格に戀をした妹の識見に敬服をして居たのですから、驚くといふよりも呆れて了つて　スグ詳しい事を問ひ合すと、妹は全く中尉が名譽の負傷の爲に。容貌が以前と變つた、それを厭ふて變心をしたのみか、旣に他の男と約束をしたといふ事まで判つて、私は妹の不貞は元より憎いですが。之までに墮落を增長させた兩親の所業……眞島家の腐敗に血の淚をそゝいだのです、それで妹の身體が、まだ救ふ事が出來るのなら一旦の罪を謝した上、龍岡さんに許して戴きたい、二つには父の非人道の行爲を諫めんと思ひ立つて、今度俄に歸つて來たのです。すると、私が恰度橫濱に上陸するのと入れ違ひに、妹が約束したと云ふ華族……唐津夏彦と云ふ男爵家の放蕩者です、その男が藝妓風の女と旅行の爲に船に乘るのと　私ピッタリ出會つたのです、妙に思つ

たものですから、そつと尾行して話を聞くと、彼は散々妹を弄んだ上、父から大金を詐取して、情婦と一緒に逃亡する途中だつたのです』

『夏彦が逃げた、フム喬子さんはモウ捨られたのか』

御堀は憤怒の色やゝ鎭まつて、この感慨深い一句を漏した、嘗て上野公園の夜、艶めく色の袖を捉へて、龍岡敬三の名に依つて、最後の忠告をすると叫んだ今ならばまだ救ふ事が出來ると云つた、その甲斐も無く我が友に反いた喬子の上を、愉快とよりも悲慘の極みに感じたのであらう。

『私は家へ歸つて見ると、想像にも及ばない家庭の腐敗……父の非人道の行爲……すでに男の胤を宿して居る妹が、捨られたが爲に發狂同樣になつて、行方が知れなくなつた位ゐは、眞島家に對する天の制裁として唯僅の前觸れに過ぎないだらうと思ふのです』

『喬子さんも居なくなつたのかね』

『私から唐津の事を聞いて、其夜何處かへ行つて了つたのです、口にするも穢らはしい女ですが、私には血を分けた妹です、野に倒れても河に浮んでも、その骨は私が拾はなければなりません、心當りを探して今日まで四國の方へ行つてたのですが遂に見當らないので、一應歸つて來まする 母は妹の事が原因で倒れた限、モウ危篤に瀕して居る有樣です、貴下の仰有る 人に與へた慘虐の苦痛は、斯して今私の家に報はれて居るのです』

切々たる悲しい詞は、人の肺腑から出る眞ごゝろを示して餘りあつた。

（三四）

汚泥に染まぬ一朶の白蓮 それはまことに浩三郎の尊い品性であつた、彼が修業に餘念も無い身でありながら、家を憂ひ妹を思ひ 父母の淺ましい所業を慨くの餘

り、遠い外國から遙々日本へ歸つて來て、挺身難に當らんとする健氣な行爲には、義に勇み怯を惡む御堀は、感動させられずには居なかつた。段々聞くに隨つて、始め罵つた勢ひは何處へやら、フムフムと身に沁みて耳を傾むけたが、心に合點が行くに同時に、振上げかねなかつた拳を解くと、忽ち堅い握手をした。

『イヤ左樣だつたかい。君は全く知らんかつたのか。それなら君を罵るのは的が外れてる、失敬々々、私は又君も一緒に、龍岡に愛想を盡かして、華族樣に惚れたのかと思つたよはゝはゝゝ』

　洒落な氣宇、竹を割つたやうな男らしい胸中……此の人に縋つてこそ、父や妹の罪を償はれやうと思つた。

『私は悲慘な一家の不幸を見るにつけ、龍岡さんに反いた父や妹の罪が實に恐ろしいのです。それで此お詫をすると同時に　何らかの方法と手段を以て、私の家と龍岡さんとの關係を以前の約束の如き、親密な平和な交誼の下に置きたい。それを仕

遂げるのは、私の重大な義務であらうと信ずるのですから』

『イヤそれを難かしからう、又龍岡の望む所ぢやないからね』

『イヱ龍岡さんの感情は、迚も一朝一夕に解けはしますまいとは覺悟して居ります併し私としては、子として親の罪……兄として妹の罪を償ふのは、自分に當然の事業なのですから』

『でも取返しのつかん事ぢや。君は誠意の龍岡も喜ばう、始めから此事件に關係して居た私も、君に會ふて非常に愉快を感じた。此事が卽ち君の誠意が屆いたと云ふもんぢやから。强て取返しのつかぬ喬子さんの事を』

『イヱ私モウあの妹の事に就ては何も申上げません。彼の如き墮落……腐つた肉體の者を何うする事が出來ませう。假令誰が許しても私あれは家へは入れません。私あれの事を云ふのぢやありません』

　浩三郎は深く考へ廻らした事を、直に御堀の同情に訴へやうとするのである。

『私罪を謝すると共に、只今申上げた希望を貫きたい爲に。私に今ひとりの妹が居ります、此妹は喬子の如き女で無い、と云ふ事を私に保證させて戴いた上、出來る事なら龍岡さんに嫁入らせたい。それに就ては』

『一寸待ちたまへ』

と御堀は詞を遮つて。

『君の妹……と云やア喬子さんの姉さんかね。眞島家には、君と喬子さんの兩人だらう兄弟は』

『ハイ……それは兩人だつたのです……が實は今ひとり私には妹が』

『フムー』

『私貴下の前には何も隱しません。父の罪惡は、龍岡さんに對する不義不信の外にまた他に意外の醜怪な秘密がある事を發見したのです。それは今申上げた、喬子の外の妹の事なんです』

御堀は最前から、云ほうやうのない興味……それは自分達の周圍に起つた出來事が、全然鑄型にはまつた如く、因果律といふものゝ鮮かさを見せるやうなのに、奇しき感想を禁め得ない……で浩三郎の話を聞いて居たのであるが。一方には又、非道の父と不義の妹との中に狹まれて、この篤實の青年が骨を碎く苦勞に同情の涙を催した。

『喬子さんの外に妹があつて、それがお父さんの罪惡……と云はれると秘密な隱し子でもあつたと云ふのだね』

『お察しの通りです。父は其秘密の子……その親に對し、實に云ふに忍びない背德の行爲をして居るのです。私は龍岡さんに謝罪すると同樣に　悲慘な運命に弄ばれて居る私の　妹　を救はねばなりません』

『能く解つた、君の云はるゝ事は私には能く解つて居る君は其　妹　さんの人格を信じ、それを喬子さんの代りに龍岡に遣らうと云はるゝのだらう君の美しい精神と、

家庭の爲に盡さるゝ努力には實に私は同情する。併し君はその秘密の妹さんの居所を知つて居られるかね』

『ハイ。それが實は斯うなのです。私がまだ歸らない前に、憐れな妹は父を訪ねて邸に來たのです。すると父は無情にも』

『君。其事なら我輩の方が能く知つて居る。君は今其婦人が何處に居ると云ふ事も知るまいね』

『私は一生懸命に妹の所在を探して居るのです』

『左樣だらう』

と御堀は頷いて。

『君がお父さんや喬子さんと同腹で無い事を知つた私は、君の感ずべき誠意に酬る爲に、其妹さんに逢はせて上げやうか』

『エッ』

『君が驚きも喜びもする事がある。今から僕に隨いて來たまへ』

（三二五）

赤十字病院の待合所で、浩三郎は御堀の出て來るのを待つ間、夢の中の彷徨のやうな心地で居た。

彼は喬子が居なくなつたのは、必定夏彦の後を追うたものと考へて、船の疲勞を休める隙もなく、直に四國路に渡り、夏彦の所在を求めたのであるが、目指した溫泉にも居らず、妹の行方も遂に知れなかつた、九州にも遊ぶやうなことを、女との話に漏したのを聞いたから、そこまでもと思つたのであるが、今度の騷動に病氣になつた母が、出發の時に容態が頗る掛念でならぬので、出來るだけ搜索の手當をした上で、一應家へ歸つて來たのである。

歸つて見ると、母はモウ危篤に瀕して居る、流石の父も内と外と一時に起つた災禍に唯當惑の嘆息つく〴〵、我身の爲て來た行爲を、恐怖の心で反省るらしい態度が見られる、浩三郎はこゝぞと父に對つて血涙しぼる强諫をした、始めて知つた花枝の秘密、その母子に對する父が殘酷の所置、それらと合せて龍岡家に爲した不信不義、これらもろ〳〵の罪を悔ひ過ちを謝するに適當な所置を執らぬ間は、天の下した災殃の決して免るゝに道の無いことを、理を盡して說いたのである。浩造はそれに屈伏する前に、浩三郎の大きな決心に慄へて居た。返答に依ては自分も家と親とを捨かねまじき氣振を示されて、默つて柔順に『すべてお前に任すから』と云ふより他は無かつたのである。

　喬子の行衛を探す事よりも、痛ましい花枝を救ふのが急務である、夏彦を捕へるよりも、龍岡家へ謝罪が順序である。任かすとある以上、一切干涉は爲ますまいねと念を押して、浩三郎は深く慮つて着手したのが、御堀に向つて打明けた通り、花

枝を探し出して邸に入れ、改めて龍岡家へ嫁入らせたいといふ希望であつた。けれども、肝腎の花枝の居所は知れぬ。非道の父に憤りを含みて、そも今は何處の果に孤獨の憂きを泣いて居ることか。寸時も早く救ひ出し、妹よ兄と名乘り合ひたい。その時父の罪は減せられやう。

　私に隨いて來い、その事に就ては君よりも深い關係を有つ私であると云つて御堀は否應なしに此赤十字病院へ浩三郎を引張つて來た。君を驚かせ又喜ばせる事があると云ふ。待合所に唯ひとり、出て來る人を待つ間の浩三郎の心は波のやうに動搖いだ。

『ヤ君待たしたね、一寸醫者の許可を受けんならんからね、そんな事で手間取つたのぢや。さあ行かう、はゝはゝゝ君何んな事かと思つて心配してるね、心配しなくても可い、驚いた次に喜んで、それから互に握手をして、兄妹の名乘をすれば可いのぢや』

妹の所在を知つて居るかと尋ね、兄妹の名乘をすれば可いと云ふ、浩三郎は胸を轟かせた、御堀に導かれて長い廊下を進み、外科特別室と區劃されたその第何號室かの扉の前で。

『さあ此室だ、君この名札を讀んで見たまへ』

御堀の指す文字を仰ぐと。

『……龍岡花枝……』

浩三郎は釘づけされたものゝ如く身動きだもせず名札を眺めた。

(三六)

御堀は前に立つて扉を開いた、室の中央の寢臺の上に、浩三郎は視線を注いだ、白い搔卷を乘せて靜かに横臥になつて居る婦人の、丸髷と白い顏の半面が見へた、

御堀は其傍に進んで。

『連れて來ましたぞ、ャ貴女泣いて居られるか、ウムそれは左樣だらう、併し斯な愉快な事は無いから、氣を落つけて對面されるが可い』

斯う云つて後を顧くと。

『君、驚いた後は喜びぢや、君の尋ねて居られる妹の花枝さんに逢はせやう、花枝さんぢや、此處へ來て兄妹の名乘をしたまへ』

『妹か？』

浩三郎は我を忘れて寢臺に駈寄つた、覗き込む顏と起き上る花枝の顏と、始めて知つた兄と妹は、こゝに面をあはせて嬉しい悲しい情に震ふ手を握り締めた、互に一言の物は得云はず、涙ばかりがハラ〳〵と落ちる。

『君その花枝さんは既に龍岡の妻ですぞ』

花枝が握つた手を離したら、浩三郎は後へ倒れるのだつたかも知れぬ。

『その媒介を執つたのは我輩ぢや、私は母に別れ父に捨てられた孤兒……孤兒同樣な境遇から花枝さんを探し出して、喬子さんに捨てられた龍岡の妻となつて貰つた其徑路は後から話すとして、先つ君に質ねたい事がある、花枝さんは君のお父さんの爲に虐遇れ、深い恨みを含んで死なれた母に對する孝心から、眞島家に對しては仇敵の如き感情を有つて居られる、それが僕の口から君の事を話し、君がお父さんや喬子さんの罪を償ふ爲に苦勞をして居る事を告げると胸に蟠まる恨みも怒りも忘れて早く兄に逢はせて吳れ、逢はせて吳れと云つて身の惱みも忘れてしまつて』

浩三郎は握つた妹の手を振動かして。

『病氣は負傷ですか、何うしたのです此繃帶は、何うして病院へ來て居るのですか』

『それも私が說明しやう、君は喬子さんを失つても、此花枝さんといふ妹を得た事を、神に謝さなければなりませんぞ、花枝さんは女丈夫だ』

と云ひつ、御堀は架上にある病床日誌を手に取つて擴げた。

『之を見たまへ、之を讀んだら花枝さんが病院に居る事情も、この腕の繃帶の事も判る』

手に受けて讀む文字には、實に勇ましくも健氣なる花枝の行動が知れた、彼女は夫敬三の顏に殘る名譽の創痕……それは又夫の心に譬へがたない煩惱と苦痛を與へて、喬子との悲劇の原因を爲した、敵彈に抉り取られた恐ろしい創の痕を、其創痕に新しい肉を植へ拭ふが如く癒すといふ、造化の巧を奪ふ最近進步の外科手術のある事を知り我身の肉を剝ぎ取つて夫の創傷が癒したい希望を、夫や母には隱して御堀に相談したのである、物に動せぬ御堀もこれには驚かされた、そうして種々に之を制めたが花枝は遂に聞かなかつた、果は自身にこの赤十字病院に來て嘗て青島で敬三の危い命を救ふた當時の總督府病院の院長、それが恰も赤十字の院長であるのを幸ひ、切に賴んで止まぬのであつた、院長もその眞ごゝろに動かされて御堀に交

渉を始めた、御堀は斯界の神と尊敬さるゝ博士から、この女丈夫の眞心に、私の手術刀の威力が加はつたら、立派な成功を保證するとの一言を聞いて、眞佐子には打明け敬三には隱し、遂に創傷の大手術にかゝつたのである、敬三は妻の花枝が自分と同じ病院に在る事を知らなかつた顔に埋めらるゝ肉が妻のものとは知る由も無かつた。

博士の證明した如く、双方共に經過は頗る良い、モウ花枝さんは退院が出來る、君はこの女丈夫の妹を以て愉快の情に堪へんでせう」

浩三郎は左右に花枝と御堀の手を握つて。

「私お願ひです、妹を私の父の子として……私の妹として……眞島花枝として龍岡さんの妻になる事をお許し下さい」

（三十七）

長門の靈泉と聞ゑた深川湯本の湯に、此間から滯在して居る東京の客があつた、阪田屋といふ一等旅館の離座敷を借り、かゝる僻地には例もない贅澤振を見せ、近在から秋の收穫を終つて、土落しと稱して湯治に來る農夫の群達の目を睜らせた。

客は貴公子の風采を備へた若者と、その夫人らしい美人であつた。摺鉢の底見たやうな狹い溫泉は、この阪田屋の客の噂で人の口が賑うた。

靈湯の後に奇拔の背景をした住吉の森は、その泉を人間に賜はつた、本地垂迹の大神を祀る。常磐木の色濃かに、滾々として晝夜を分かず湧いて休まざる靈泉を守護の宮居は尊い。

森は二階家ほどの高さの崖の上にある崖の半腹に架造りの廊下が渡されて、それ

は旅館阪田屋の座敷から、土を踏まずに湯に浴せらるゝ構造である。千代川の溪流の音漸く高く、夕色は磧に瀉り落る捨湯の蒸氣から起つて、夢のやうな風情に湯の郷の暮る頃。噂の種の夫婦は定つて崖の廊下に睦じ氣な二つの影を並べるのであつた。今日も時間は其頃になつた。大寧寺の晩鐘が傳はる。

『モウ此地も厭になつ了つたわ。毎日通辯がなくちや解らない人達を相手にしてるのも隨分倦怠するわ。貴郎モウ出發うぢやありませんか』

『出發ても可いがね。まだ東京へ歸るのは險呑だぜ』

『あんな事云つて直に脅すんだもの。妾歸りたいわ、染々東京が戀しいんだもの

『おれが厭になつたと云はないだけが見つけものか』

『だつてモウ』

と女は指を折つて。

『東京を出てからほら八九十、と三月になるわ』

『七十九日よりは一寸延びたが、まだ餘熱は冷めまいよ。之から九州へ渡つて、今年中は旅で暮すのだね』

『何だか妾悲しくなるわ』

柱にもたれてうつとりと空を見上げた女の顔は寂しい。

『はゝはゝゝこれだけ好き放題の事をして悲しがるにも當るまい。隱氣な事を云ふと魔が魅すぜ。さあ一ぱい浴びて來うよ』

『喬子さんは何うしてるでせうね』

『馬鹿ッ、詰らない事を』

と男は女の手を取つた。

廊下の端でバツタリと黒い影が前を塞いだ。

『旦那ぢやァござゐませんか』

『誰だ?』

『唐津の旦那ぢやアござわませんか』

『エッ』

『へゝへゝゝゝ矢張旦那でござわましたか、銀次の野郎で』

〈三八〉

深川温泉を距る三里、仙崎の港に近い青海の濱邊の夜。

『ヤイお孃さん、お待ちなせわつたらお待ちなせわよ。方角も判らない土地で、盲滅法に駈け出したつて仕方が無わ。オッと危ねわ。それ云はぬ事ぢやァ無わ、波に浚はれたら何うするんです』

『イエ銀次離してお呉れ、妾はあの兩人に追付かなければ』

『追付くたつて先方は俥でさア。足弱の上にその身体で、何うして孃さんが追付けるものですかよ。まア氣を鎭めて、私の云ふ事をお聞きなせわつたら』

捉へた袂をグッと引かれて、喬子はヨロ〳〵として砂の上に倒れた。

『ア、妾何しやう……妾何しやう』

『孃さん。お前さん可愛想に、あの色魔の夏彦に欺されて、酷い目に逢ひなすつたなア』

磯打つ波の音は物凄い。際涯知らぬ海の上に、傾むく月の光りは心を悸かせる。

『妾四國から中國……こんな遠い所まで追ふて來て、漸く捉まへたと思つたら又欺されてこんな目に……アア妾何うしやうねわ』

眞砂を漂はす涙を落すも、悔の八千たび血に啼く聲は、空く松吹く風に消ねて、道踏迷ふた婦人の末は酷たらしい。

『妾何うしても捉まへねばッ』

スックと起つて又駈け出さうとする。

『無益だ〳〵。行つたつて無益の事だ斯うなつたらお前さんが可愛想だ。俺ア何も彼も打明けて云つて上げませう。嬢さん、驚いちやア可けませんせ』

片手に確乎と捉へた儘、毛脛をまくつて低う蹲んだ。

『俺ア今夜お前さんを、殺して呉れつて頼まれたのですぜ』

『エヽ』

『お前さんも驚くだらうが、頼まれた俺も震ひ上つたね、あれ位ゐ恐ろしい悪黨が有つたもんぢや無ゑ。何だつてあの玉子と云ふ海山千年の古狐を、初瀬菊枝なんて化けの皮を被らせて、散々嬢さんを欺した揚句、邸に拋つてけぼりを喰して女と逃げて行くなんテ、爲る事が餘り因業過ぎらア、それも可いとして海山越ゑて後を追つて來た嬢さんを、生かして置いちやア邪魔になるてんで、俺に何うかして呉れつて頼みさ』

喬子はモウ泣かなかつた。ブル〳〵と五體を震はせて、砂に埋るやうに俯伏して居る。一思ひに波の來て、罪の果の身を滲へて呉れと祈るのだらう。

『俺だつてあの夏彦さんには隨分酷い目に逢はされて居るんだ。その爲に東京にも居られねゑ身になつて、世間を狹く旅をしてる中、計らず深川の溫泉で、めぐり逢つて一緒に居るところへ、お前さんが不意に飛込んだので、泡を喰つてこゝまで逃げて來たが、兩人はこれから九州へ渡る積なんだ。その先々まで從けられちや厄介だから、俺に殺して呉れろと云ふのだ。悪黨だつてあんなのは類が無ゑや』

銀次は斯云ながらそろ〳〵と喬子の身体を自分の方へ引寄せやうとした。それでも何の感覺も無いやうに、引かるゝ儘に半身を横へた。

『へゝへゝゝゝだけど嬢さん。決して心配する事は要りませんせ。まだ俺は夏彦さん程の悪黨にはなれねゑからね。何の可愛想なお前さんを殺して堪るもんか。これから一緒にお伴をして、東京のお邸へお連れ申しませうよ。ねゑ左樣爲せゑよ。へゝへへゝ可愛想に、眞島のお嬢さんとも有らうものが、この姿は何てことでござい

ます。すつかりお痩せなすつたね　へゝへゝゝゝこの手のお痩せなすつたア……

銀次が上に乗と見ねたのは、反對に喬子が突立つたのだつた。

『はゝはゝゝゝゝ夏彦さん菊枝さん、妾も一緒に行つてよ。一緒に海の底に行きませうね』

『孃さんッ』

と銀次も立上つたが二歩三歩後へ退つた、眞青な顏に笑ひを含んで・氣の狂つた喬子の姿が凄かつた。颯と驅け出すのを抱き止めやうとしたが、遲し引く波の早さで崖に走せ上る。

『危ねヽッ』

叫ぶ聲を後にして。高鳴り響く夜の潮へ、喬子の身体は眞黑の線引いて落ちた。

《三九》

龍岡敬三と妻の花枝が、こゝ肥薩の國境、雲ヶ嶽にある觀測所に來て、下界の趣きの變つた山上生活を營む事になつたのはツイ此頃の事である、名譽の負傷の爲に現役に就かなくなつた敬三は、かねて天象學に精通し、甞て雲の分類に就て、その研究の結果を發表し、世人を驚かした時、斯の學に多くの趣味を有たせらるゝ某宮殿下が、非常に彼の學才を賞でさせたまひ、軍籍にあらぬ身ならば傍り近く仕へさせたいとのお言葉さへあつた、このやんごとなき方の、深くも覺し立たせておん自ら創設あらせられしはこの雲ヶ嶽の觀測所である。

今は宮殿下は內府の重職に在らせらるゝが爲、御經營の觀測所は自然に閉ちられてあつたのを、こたび敬三が閑散の身となるを聞し召されて、有難き御諚は陸軍當

局を經て彼に下つた。敬三は其肉體の醜くなつたのを妻の献身の眞ごゝろで癒やした、今またこの身に餘る光榮を拜して、彼の精神には復活の命が與へられた、勇躍して恩命を拜し、誓つて斯界に貢献すべく、大いなる希望を抱いて赴任の途に上つたのであるが、妻の花枝は強て同行を乞ふて止まなかつた、不自由なる山上生活に夫ひとりを出立させる事は、彼の忍び能はぬことであつた、眞佐子は男恥かしい花枝の魂を知つて居る、我が身の肉を割いて夫の創痕を癒やした古への烈婦にもその例證のあるまい健氣さに、神とも佛とも尊び且つ愛して居るのであるから、この度の赴任に同行を求める嫁の希望には一も二も無く賛成した、で老人の傍に魚藤親子が留守居する事になり、夫婦は相携へて山籠りの人と爲つたのである。

雲ヶ嶽の觀測所では、龍岡夫婦の外に、今一人の若い婦人が居る、青海の濱の夜の波は一たび喬子を呑んだ後、罪の屍を弄ぶやうに、周防灘の洋上へ浮び漂はせた恰も龍岡夫婦の乘船が、そこを通つて之を救ひ上げる、息吹き返した喬子は、死よりも苦しい生に斯うして引戻されたのである。

〈四〇〉

喬子の身に纏る奇しき運命は、波濤のやうに起伏するこの雲ヶ嶽山系の有樣にも似た。波間に浮く身體を救ひ上げられた時、其船に乘合はせて居た敬三夫婦の驚愕よりも、息吹返した彼女は、再び喪神せんばかりであつた。

悸き怖れた敬三の顏の創痕が、拭ふが如くその痕跡をも止めないことや。自分の爲には姉となる花枝が、敬三の妻となつて居ることなぞ、それらも悉く驚かるゝ事のみであるが。喬子の心を最も強く刺戟したのは、憎みと蔑みの的であるべき自分に對し、敬三夫婦が眞心からの深切を傾け盡くす事であつた。

悔恨の情は肉も骨も鑽りつけるやうである。悶へに悶へ惱みに惱んだ揚句、矢張

死の外には持つて行き場の無い罪の身とある事を覺ると共に、怪しくも心亂れては大海の潮を安き坐席の幻影とも見たか。あの儘で漂ふて居たら魚の餌食となるのであつた。それを助けて介抱に力をつくす敬三と花枝は、まことに神の如き心をもて喬子に對するのであつた。

海から山へと運ばれた喬子は、日數よりも醫療よりも、夫婦の深切の爲に漸次に快癒に赴くのである。精神も鎮まつて起臥も自由になつた。判然と周圍の辨別がつくやうになつてから、詞に云へぬ感謝を唯泣きに泣いて夫婦に捧げる。

『モウそんな事を曰はないで、これからは姉妹睦じう力になり合ふて行きませう、暫時この山の中に居る間には、世間の取沙汰も自然に薄らいで來ますから、その時には東京へ一緒に歸る事にしませう、それまでは今までの事なんか一切忘れて了つて。この靜かな山の上で、暢氣に養生をして下さい』

と花枝は云つた、實に山は大古の靜寂である、麓の里に立つ炊煙は、浮世の雞鐘

の音をのせて、雲に入る時こゝを訪れはするが。無限の空にそゝり立つ森々とした名嶽の絶巓は、人間の事を思ふには、餘りに崇高く偉大きかつた。

『私はモウ人界の事は一切忘れて居る。私は唯雲を觀るばかりです。定めがたない心を雲に譬へるけれど。私の心は雲に執着き、雲に凝り固まつて居る、研究の結果を發表する迄は、雲に近い此山は斷じて下りません。その間の時間は貴女の精神と身體を健全にするには充分であらう。唯夫婦に任せてお置きなさい』

と敬三は云つた。彼はこの假小屋より十丁ばかり隔つる絶頂の觀測臺に通ひ蓬々として舞ひ飛び走り來る無心の雲を友として居る。恨怨も憤怒も今の彼には小さかつた。

斯うして慰めらるゝ喬子は、いと平和な山の日を送つて居ると。

今年の夏の流行は馬鹿派手な浴衣と山嶺へ上ることが盛んとなつた。箱庭見たいな山に勿体ないアルプスの名をつけて。人間ならば訴訟沙汰になるところを、海拔

の奇抜のと騒ぎ立た。この雲ヶ嶽の麓には焼津の温泉がある。湯に茹つて退屈に困じた浴客が、例のアルプスがつて頭の上の観測所附近へ、チラホラと派手な浴衣なんかの姿を見せる。

『今日は又人間が上つて來るぜ』

と面白い事を云つて敬三は観測臺へ出掛けた、その留守の事で。午飯の辨當を運んで花枝も夫の所へ上つた。後には喬子ひとり、山はモウ朝夕の寒さを坐席を垂て防いだ、二間ほどに區劃られた假小屋の奥に、頭痛を押へて眠るともなく枕を當て居ると、敬三の云つた如く、果して見物らしい人聲が聞ゑる聞くともなく耳を澄まして居た喬子は忽ちムク〳〵と起上つた。

（四一）

小屋の表に聞ゑる人聲は、二三人で賑やかな調子

『斯涼しくなつちや　アルプス熱も冷めたらう、モウ山へ登る氣候ぢや無いわね』

『だつて妾この通りだわ。一ぱいの汗』

『奥さんは無理はございませんや、こんな山阪は始めてゝございませう』

『だから止さうと云ふのを肯かないものだから』

『だつて斯な僻地まで來て、山へ上らなかつたら　東京へ歸つて威張られないぢやありませんか』

『はゝはゝゝ斯云ふアルプス黨で、何處の山も踏み汚されたんだね』

『あら、何して汚れるの？』

『汚れるさ、お前なざア最も汚れるね、これまで散々男を欺した罪業の身體がからね』

『ほ、お手元拜見、何方が汚れるんだか、山に問ふて御覧なさいよ』

『山よりは銀次に問はうか』

と振顧る。

『旦那、こんな珍らしい花がございますせ』

五六間遅れた供の銀次は、黒い岩に生ねた苔の花をむしつて居る。

『はゝはゝゝゝあんな男でも、山ン中へ來ると人並優しい心持になるから可笑しいぢやないか』

『誰だつて左樣だわ。餘り靜かな所爲か、何だか種んな事が思はれるわ』

『いろんな事つて何んな事だね』

『ねね貴郎……』

『何だい、馬鹿に陰氣な顔をするぢやないか、疲れたのだね、この小屋の蔭で一休みしやうか』

切り倒された松の木へ腰を掛ける、女も手巾を敷いて並んだ。

『ヤ湯の町は豆のやうですせ、佳い眺望だなア』

銀次は小手をかざして四方を眺めて居る。

『お玉、何だい、今云ひかけたのは』

『イエ妾厭な事思ひ出したのよ』

『又彼事かッ、チョッ詰らないことを』

『喬子さんの事よ』

『判つてるよ、何時でも變な顔をしたら極つて喬子だ、神經に爲つ了つたんだ、止さないかッ』

『……神經ッてこと無いけれど……寂しい時なんか……斯んな山の中へ來たりすると、妾スグあの事が氣になるんだらの』

『夫が卽ち神經ぢやないか、死んだ者の事なんか考へたつて詰らないよ』

『死んでるでしやうか喬子さん？』

『喬子々々と云ふなつて云ふのに、くだらないッ』

『あれッ』

と男の膝へ手をやつた、怪禽一聲。

『何だ、烏ぢやアないかはゝはゝゝ。さア行かう〳〵、あすこに觀測所の塔が見ゐる、あれ迄行つて見やう』

『モウ止して下りやうぢやありませんか』

『急に弱くなつたね、オイ銀次、モウ動けないと仰有るんだ、何しやう』

『モウ五六丁でございますぜ、私が後から押しやせうか』

『イヱ身体は何うもないけれど、何だか氣が進まないんだもの、下りませうよ、ねヽ貴郞』

『下りても可いけれど、折角此處まで來たになア』

『切れるんですつて』

不意に云つて、お玉にモウ麓の方へ足を向けた。

『切れる？』

『何なに深く云ひ交した仲でも、一緒に山めぐりを爲ると、キツと切れるつて云ふわ』

『はゝはゝゝ、そんな馬鹿な事があるもんか』

『イヱ眞個よ、妾の知つてる妓で、思ひ合つた兩人が手をとつて、あの京都の比叡山つて高い山があるでせうあの山へ兩入で登つたのですつて、何でも散々苦勞を爲盡して、モウ生きてるよりは死んだ方が面白い、と云ふところまで行つたんですね、山の奥で情死の場所を探す氣だつたかも知れないわね。それが何でせう、山を廻つてグタ〳〵に疲れて、麓の茶店まで下りて來ると、そこでブッツリ切れつ了つたんですつて』

『はゝはゝゝゝ』

と男は堪らないやうに笑つた、そして。

『それは蛇と腹が減つたんだらう』

と云つた。

『御飯を喫べながら相談が出來て、左樣ならでそれつ切りだつたつて、キッと山の祟りだらうツて、大變な評判だつたさうですわ』

緣起でも無ね、それぢやァ旦那お下りなさいましよ、そのお睦じい仲に事があつちや大變だ、はゝはゝゝ』

三人は元來し道に引返す、賑やかな聲は漸次に遠く低くなる。

垂の蓆をサッとかゝげて、蛇の如く首をあげた喬子の顏は、生あるものとは思はれなかつた』

『……夏彥さん……玉子……銀次……』

斯う云ひながらヨロ〳〵と小屋を後に夢心地に驅出した喬子の手には、戰慄すべき或物が握られた、それは强度の爆裂彈である　崖を崩して此の小屋を建る時、用ひ殘しの物を敬三が保管して居た。

『四人一緒にッ』

脫れやうとした浮世の苦痛は、執念く我を追ふて三人を山へ登らせた、戀も恪氣も忘れた身に、鹿の鳴く音さへ覺りの邪魔を、これは眼前に見る憎い怨めしい其聲その姿。

『四人一緒にッ』

『爆彈を抱いた喬子は宛から山の魔神の如く形相凄じく驀地に夏彥お玉の一行を追ふた。

×　×　×　×　×　×　×　×　×　×　×

『花さん、一寸これを覗いて御覽、ほら此の見當だ』

觀測臺から急いで下りた敬三は、今小屋から辨當を持つて來た妻の花枝に、手に持つ望遠鏡を渡して。

『來たよ〳〵、遣つて來たよ』

夫の氣振が左も愉快さうに見ゐたので花枝は常に口にする卷雲か亂雲かと思つた打霞む筑紫の海の外まで手に取るやうな、望遠鏡を當て度を合はす。

『違ふ〳〵、雲ぢや無い人間、そら此方角だ』

優しい夫の手は肩へ、敎へられた麓を俯觀ると。

『あの白雲神社の鳥居の前を御覽、道が白う見ゐるだらう、あそこの松の木の下の茶店だ』

『おゝ』

『はゝはゝゝ見ゐかね』

『見ゐました〳〵』

花枝は躍り上るやうな歡こびの情を現はした、急いで望遠鏡を拭いて又凝と眺める。

『一番此方に居るのが島だらう』

『島さんです、その次のがお母樣よ』

『眞島さんも浩三郎君も居るだらう』

『ハイ父も……兄も』

嬉し淚に鏡玉が曇る。

『私にも見せてお吳れ』

敬三は覗いて。

『ヤ魚藤も居る、藤三郎が宰領で來たんだな、こんなに早く來るとは思はなかつた之は愉快だ』

『妾お迎ひに下りませうね』

『私も下りる、今日はこれで雲は休みだはゝはゝゝ』

俄に器械を片附る、山をさして下つて來た東京の一行に、夫婦は歡喜に周章てた。

『妾一足先に下りて、此事を妹に知らせまうね』

『左樣だ、喬さんも定て喜ふだらう』

絶頂と麓の歡喜と、その中間の谷底には凄慘な悲劇。

轟然として鳴り響いた爆彈の音。煙は夏の積雲の如く、この觀測臺へと上り昇る。

雲（終編）（終）

羽様荷香氏
著作目錄

命	全三冊
男	全四冊
雲	全五冊
電	全三冊
武士系	全一冊

上記の通りいづれも樋口隆文館より發行いたし居候

◉樋口隆文館
營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版……及び其御賣を專業と致居候に付各地方の販賣業者諸君……及び貸本を營業とせらるゝ諸君は多少に拘らず御注文被下度候

△御賣目錄御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ

△樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さずに新版發行致べく候

△樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候

△樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文にて汽車便又は汽船便其他成丈け早く屆く方法を以て御送品可致候

大正四年十二月廿五日印刷
大正四年十二月三十日發行　（定價金五拾錢）

著作權所有

雲 終編

著者　羽様荷香

大阪市南區鰻谷仲之町二百二十四番屋敷
發行者　樋口源次郎

大阪市西區新町北通一丁目五十番地
印刷者　河上貞次郎

發賣元　大阪市南區三休橋鰻谷南へ入西側　樋口隆文館
（振替口座大阪八七九七）

江見水蔭君作　八幡白帆君畫

中央新聞掲載小説

大正五人女

全五冊

木版手摺極彩色美人挿畫附

定價各一冊五十錢宛

送料各一冊六錢宛

全五冊一時に御注文の方に限り送料共に特價金貳圓(但し内地限り)

本篇は約九ケ月の長期に亘り、東都中央新聞に掲載せられて空前の好評を博し、中外數十萬の讀者をして心醉歡喜しめたる一大活劇小説にして實に過去に於ける數多き水蔭先生の作物中にても拔群傑出せる最長の雄篇である。

編中に活現する女の種類には、女優あり、藝妓あり、猛獸使ひの女あり、富豪の奥様あり、墮落女學生あり、賢夫人あり、薄馬鹿女中あり、淫婦、毒婦、菩薩、夜叉、個々入り亂れて興味深き大活動をなし舞臺の變化幻奇妙怪を極めた、近來稀に見るの面白き小説である。

島川七石君作　山本英春君畫

戀のしがらみ　全三冊

蘭子と信吉　全三冊

本書は、著者が一代の心血を傾注して創作せられし一大雄篇にして、其内容たるや、主人公は健實なる志想を抱いて帝都に苦學する一青年を以てし、此快男子に配するに、可憐なる麗人、失戀の令孃、奸譎憎むべき賣國奴、刺客、女優、老政治家、歌妓、亡命の志士、不良青年、變裝刑事、其他社會に在らゆる階級の人物をば、舞臺の變化と共に活躍せしめて、以て讀者を起伏重疊たる情海の波瀾の中に捲き込まんとする、眞に近來稀に見る良家庭小説にして、又絶好の立志的戀愛悲劇小説である、乞ふ愛讀を賜はらん事を。

木版手摺極彩

美人挿畫附

定價各一冊五十錢宛

送料各一冊六　錢

全六冊一時に御注文の方に限り送料共に

特價　貳圓五拾錢

(但し内地限り)

露光量違いの為重複撮影

渡邊默禪氏著　長谷川小信氏畫

事實小說　怪の怪　全二册

これは默禪子が方寸より描き出した。虛構架空の小說にはあらず。由緒正しき東北の名家として其名を知られし黑石子爵〔憚つて假名を用ゆ〕家に於ける。家庭大混亂の眞相を描寫した。奇々怪々なる事實譚であつて。篇中に活動する人物には。表に忠義の假面を被り。そして腹中には恐るべきの大野心を包んで。御家を横領せんとする野心家も在れば。マンマと若殿を掌中に丸めこんで。スンデニ大仕事を爲遂げんとした。外見は佛菩薩のやうに優しく。而その實は夜叉鬼神よりも辣腕物凄い怪美人も居る。車夫に連れ出される可憐の孃樣もあれば。好いた藝妓と手に手を執つて。落人と洒落玉ふ貴公子もあらうといふ。至極面白い怪小說でございますから是非一度は讀で見て下さいと。隆文館の主人がお願がいたします。

表紙口繪共極彩色美本
實價各一册四拾五錢
郵稅各一册六錢

樋口 隆文館 出版新小說之部

[illegible]
江見水蔭 □三[illegible]
同 □三怪人後編 [illegible]
同 □三怪人[illegible] [illegible]
同 □三怪人[illegible] [illegible]面白い[illegible]
同 □[illegible]の[illegible] これは[illegible]大好評[illegible]
同 □[illegible]の[illegible] [illegible]
同 ×大正五人女 これは東京新聞で大評判を取りまし
同 ×大正五人女後編 [illegible]
同 ×大正五人女[illegible] [illegible]面白い小說です
同 ×[illegible]の女 これも大阪[illegible]で大好評であります
同 ×泣かぬ女 [illegible]氏一流の面白い小說です
同 ×泣かぬ女後編
同 ×女馬賊 これも面白い水蔭式の新小說です
同 ×女馬賊後編

伊原青々園 □迷ひ子 これは東京都新聞にて掲載して大好評を博せし面白き新小說なり
同 □迷ひ子後編
同 ×迷ひ子[illegible]
渡邊默禪 □怪の怪 これは[illegible]面白い小說です
同 □怪の怪後編
同 □美人[illegible] これは[illegible]に[illegible]の小說なり
同 □美人[illegible]後編
同 □女獅子 これは滿洲にて目覺ましき大活動をせし天下[illegible]の一女傑の傳記なり
同 □[illegible]女獅子
同 □續々女獅子
同 □七音[illegible] これは[illegible]の[illegible]の傳記なり
同 □七音[illegible]後編
同 □櫻井一[illegible] これは櫻井一[illegible]小判の[illegible]との關係を書いた面白いもの
同 □櫻井一[illegible]後編
同 ×風流菩薩 これは東京毎日電報に連載して大好評を博せし面白き小說なり
同 ×風流菩薩後編

露光量違いの為重複撮影

樋口隆文館 出版新小説之部

著者	書名	梗概
江見水蔭	□三怪人	これは中央新聞紙上に連載して數十萬の讀者を驚喜せしめし波瀾曲折多き面白き小說なり
同	□三怪人後編	
同	□三怪人續編	
同	□三怪人終編	
同	□探偵の娘	これは東京時事新報に連載して大好評を博せし面白き小說なり
同	□探偵の娘後編	
同	×大正五人女	これは中央新聞で大評判を取りました面白い小說です好評請合
同	×大正五人女後編	
同	×大正五人女續編	
同	×大正五人女續々編	
同	×泣かぬ女	これも大阪新報で大好評でありました水蔭氏一流の面白い小說です
同	×泣かぬ女後篇	
同	×泣かぬ女終篇	
同	×女馬賊	これも面白い水蔭式の新小說です
同	×女馬賊後篇	
伊原青々園	□迷ひ子	これは東京都新聞にて掲載して大好評を博せし面白き新小說なり
同	□迷ひ子後編	
同	×迷ひ子續編	
同	×迷ひ子終編	
渡邊默禪	□怪の怪	これは保險附の面白い小說です
同	□怪の怪後編	
同	□美人魔	これは横濱公園に於ける殺人事件の小說なり
同	□美人魔後編	
同	□女獅子	これは滿洲にて目覺ましき大活動をせし天下有稀の一女傑の傳記なり
同	□續女獅子	
同	□續々女獅子	
同	□七首藝妓	これは神出鬼沒の怪行動をなせし天下稀有の怪美人の傳記なり
同	□七首藝妓後編	
同	□櫻井一策	これは櫻井一策と小判のお春との關係を書いた面白いもの
同	□櫻井一策後編	
同	×風流菩薩	これは東京毎日電報に連載して大好評を博せし面白き小說なり
同	×風流菩薩後編	

同　□侠妓小鶴
同　□侠妓小鶴後編
これは波瀾曲折多き多趣味の小説なり

同　□千里眼
同　□千里眼後編
同　×千里眼續編
これは東京日本新聞にて讀者を狂喜せしめし大好評小説

同　×横山花子
同　×横山花子後編
これは可憐薄命なる横山花子の小説なり

同　×春の風
同　×春の風後篇
これは獸禪一流の面白い新小説です

同　□鬼梶原
同　□鬼梶原後編
同　×鬼梶原續編
これは大阪事時新報に掲載して大好評を博せし物劇に演じ又活動寫眞にても大入大當りを取りしもの

同　×雷鳴六郎
同　×雷鳴六郎後編
これも頗る好評小説

同　□磯の松風
同　□磯の松風後編
これも面白い悲劇的の新小説です

同　□千枝子
同　□千枝子後編
同　□千枝子終編
これは東京日本新聞で好評を博せし變化波瀾に富める多趣味の新小説

同　□封人窟
同　□封人窟後編
同　□封人窟終編
これも獸禪式の面白い小説です

和田天華　□静子
同　□静子後編
同　□静子終編
これは悲劇的の戀愛物で劇に演じ又活動にも映寫しいづれも大好評を博した面白いもの

同　□浪まくら
同　□浪まくら後編
同　□浪まくら終編
これも悲劇物です好評受合

同　×愛の関
同　×愛の関後編
同　×愛の関終編
これも面白い戀愛小説です

同　□戀の意氣地
同　□戀の意氣地後編
これは戀愛物で面白いものです

同　□二人の女
同　□二人の女後編
同　□二人の女終編
これは善惡二人の女を主人公とした戀愛物で面白いものです好評請合

同　□弱き人
同　□弱き人後編
同　□弱き人終編
一は温良の淑女、一は獸的の淫婦、此性情互に兩極端の二女戀に戰ふ譚

同　□おとし子
同　□おとし子後編
同　□おとし子終編
これも天華氏が得意の作です好評請合

同　□犠牲
同　□犠牲後編
同　□犠牲終編
これも面白い悲劇です

同　□罪ならぬ罪
同　□罪ならぬ罪後編
これも天華式の面白い小説です

鹿嶋櫻巷　□戀の敗者
同　□戀の敗者後編
至極面白い一風變つた戀愛小説です

同　□海の豪傑
同　□海の豪傑後編
同　□海の豪傑終編
山田長政、濱田彌兵衛等を主人公とした武張つた勇ましい冒險小説です

同　×女賊三人
同　×女賊三人後編
これは三人の毒婦を書いた新小説

羽様荷香　×男
同　×男後編
同　×男續編
同　×男終編
一風變つた男を主人公とした書かれた荷香武の小説であつた劇に活動に新聞に、いづれも多大の好評を博したものです

同　□命
同　□命後編
同　□命續編
悲劇的新小説にして劇に演じ活動寫眞にても大當りを取りし面白き小説なり

同　□武士系
これも多趣味の新悲劇物です

同　□電
同　□電後編
同　□電終編
これは女優と發明家とを主人公として書かれた面白い小説です

同　□戀の力
同　□戀の力後編
同　□戀の力終編
中容は題名によつて御推察を願ひます兎に角面白いものです

嶋川七石　×罪
同　×罪後編
これは女優と華族の令嬢を主人公として書いた家庭向の戀愛小説です

須藤南翠　□浮木船
同　□浮木船後編
二人の男が一人の女を爭ふて如何に煩悶苦心するかこれが本書の讀所

同　□闇のうつゝ
同　□闇のうつゝ後編
富に嫁がんか愛を遂げんか現代の女は多く惑へり、富か、愛か本編の主人公も其人である

小嶋孤舟　□浪かしら
同　□浪かしら後編
（大阪日報にて好評を博せし悲劇的新小說）
同　□梅花錄
同　□梅花錄後編
（戀愛小說にして大阪新報にて好評を得たる物）
同　×春待つ人
同　×春待つ人後編
同　×春待つ人終編
（これは劇に演じても大當りを取りました孤舟氏一流の戀愛小說です）
同　×花咲く家
同　×花咲く家後編
同　×花咲く家終編
（例に依つて極く面白い艶やかな小說です）
同　□さくら草紙
同　□さくら草紙後編
同　□さくら草紙終編
（これは軍事探偵を書いた小說です）
同　×蔭に咲く花
同　×蔭に咲く花後編
同　×蔭に咲く花終編
（これは某新俳優の家庭を描いた戀愛小說です）
新田靜灣　□戀の淵瀨
同　□戀の淵瀨後編
同　□戀の淵瀨終編
（極く意志の强い女を主人公として書いた戀愛小說で頗る變化波瀾に富める面白いものです）

同　□愛と財
同　□愛と財後編
同　□愛と財終編
（可憐の一婦人を主人公として書かれた家庭向の小說です戀を說き愛を語れど卑猥に陷らず）
同　□富の力
同　□富の力後編
同　□富の力終編
（これも面白い家庭向の立志戀愛小說です）
遲塚麗水　□白菊御殿
同　□銀杏小路
（これは都新聞にて大好評を得し小說）
嶋村抱月　×其の女（全）
（これは讀賣新聞にて好評を得しもの）
伊藤銀月　×予（われ）（全）
（これは銀月一流の自傳小說なり）
同　×出潮
（銀月氏一流の面白い新小說です）
同　×怒濤
同　×怒濤後編
（これは時事新報に掲載して大喝采を博せし多趣味の小說）
行友李風　×龜甲組
同　×龜甲組後編
同　×龜甲組終編
（これは明治二十一年にあつた事實小說で行友氏一流の物凄い小說です）
同　□因果經
（これは哀つぽい悲劇小說です）

春風樓主人　×藤浪
同　×藤浪後編
（これは劇に演じても好評であつた家庭向の新小說です）
安岡夢鄉　□地獄谷
同　□地獄谷後編
（二冊讀切の悲哀な小說です）
同　□薄命怨
同　□薄命怨後編
（薄命を怨める女を主人公としたる小說）
同　□罪の子
同　□罪の子後編
（意味の深い情と淚に富んだ悲劇小說）
同　□飛將軍
同　□飛將軍後編
（深山の奧の別天地を舞臺として書かれた怪奇小說です）
同　□紫組
同　□紫組後編
（これは飛將軍の續物です）
同　□背像書
同　□背像書後編
同　□背像書終編
（これは面白い新小說です劇に演じても好評を博したものです）
青峰　×女小說家（全）
（多趣味の新小說）
奴之助　□男禁制（全）
（新物で面白いもの）
中村兵衛　□探偵小說 血染の手巾（全）
（面白い事請合）
同　□小說 月の輪（全）
（新物です）
同　□女俠 水月尼（全）
（女傑の傳記です）

同　□妻の罪（全）
（新家庭物悲劇小說）
同　□狸心中（全）
（事實小說で心中物）
同　□父なき子
同　□父なき子後編
（戀愛的悲劇物です）
同　□甚九郎稲荷
同　□甚九郎稲荷後編
同　□甚九郎稲荷終編
（頗る變化波瀾に富んだ多人數の喜ぶ講談風の小說です）
山田松琴　□操くらべ
同　□操くらべ後編
（悲劇小說で面白い新物です）
同　□殘り草
同　□殘り草後編
同　□殘り草終編
（悲劇小說にして劇に演じても多大の同情を以て迎へられたものです）
同　□鐵槌の音
（一冊讀切の戀愛物）
同　□迷ひ路
同　□迷ひ路後編
（二冊讀切の戀愛物です）
根本吐芳　□三人の仇
同　□三人の仇後編
（事實小說にして新物です）
匿名子　□可憐の棄兒
同　□可憐の棄兒後編
同　□可憐の棄兒續編
（至極哀ッぽい新小說です）
半井桃水　□贋造紙幣（全）
（面白い探偵物です）

同　□慰問袋
同　□慰問袋後編　（戀愛小說で新物です）
泉鏡花　×七本櫻　（戀愛小說です）
雪鷺庵　□怪談長者屋敷
同　□怪談後の長者屋敷　（これは二冊で讀切の怪談物です）
山岸荷葉　□五・人娘（全）（これは新物です）
黑法師霞堤　□戀しき仇（全）（家庭的戀愛小說）
霞提　×澄める心（全）（戀愛家庭小說なり）
同　□女學生
同　□女學生後編　（女學生を主人公として書いた戀愛物）
同　□現代の女
同　□現代の女後編　（當世のハイカラ令孃を主人公とした新物です）
同　×若夫婦　（情愛に富んだ新物）
同　□琴の音　（これも面白い新物）
五竹園　□香人形
同　□香人形後編　（これは大阪朝日新聞紙上で多大の同情を以て讀者に迎へられた悲哀小說ですから家庭向の讀物として宜しいものです）

如鬼坊　□鱗與之助
同　□乳守のお仙
同　□池沼鯉之助　（鱗與之助の變化に富める面白い一代記です三冊續き）
稻花生、　□小車新三
同　□後の小車　（二冊續きで面白いものです）
同　□金齒のお黑（全）（女の墮落する道行を書いたものです）
芳尾生　□新說怪談皿屋敷
同　□怪談後の皿屋敷　（怪談物で皿屋敷の新說です）
春秋園　□俠妓胡蝶
同　□俠妓胡蝶後編　（これは危くも惡漢の手に落ちてビールの樽詰となつて無殘や海外に密航せしめられんとした藝妓胡蝶の身上を書いたものです）
三嶋霜川　□行き違ひ
同　□行き違ひ後編　（これは面白い戀愛小說です）
花冠者　□思はぬ戀
同　□思はぬ戀後編　（思ふ戀は仲は遂げられずして戀は思はぬ事によつてなれり本書は家庭向の戀愛小說）

―（まだ此外にも續々と引續き澤山面白い新版を發行します）―

◉樋口隆文館出版講談小說之部

◉玉田玉秀齋講演

◎（武田家三彈正）眞田鬼憚正
◎同　保科槍彈正
◎同　高阪智惠彈正　（これは有名なる武田家三彈正の傳記です）全三冊
○（元和豪傑）中條兵庫之助
○（入間川大仇討）中條武勇傳
○中條兵庫旅日記　（これは劍法中條流の元祖として有名なる元和豪傑中條兵庫之助の面白い一代記です）全四冊
○（奥羽漫遊）後の中條
○（豪傑）緒方力丸弘行
○豪傑魔風軍藤太
○（緒方力丸）黑姫山の旗揚　（これは越後の黑姫山の旗上をした豪傑兒雷也の傳記でござる）全三冊
○（天保事變）浪花の大潮
○（天保事變）後の大潮　（これは有名なる大鹽平八郎先生の傳記です全二冊）
○（寛永豪傑）春日熊之亟
○（春日後日）宮嶋大仇討　（これは豪傑春日熊之亟の面白い一代記です全二冊）
○六鄕縫之助
○六鄕武勇傳　（これは玉秀齋得意の武勇傳で二冊物です）
○（豪傑）兒玉由利之助
○同後の由利之助　（これも玉秀齋得意の豪傑物です）全二冊
○（野州甲山）惡狐塚由來
○（天下豪傑）惡狐退治　（これは豪傑が勢揃ひをして野州庚申山に惡狐を退治るといふ面白い御話）全三冊
○豪傑松平康之助
○（幕末奇傑）近藤勇
○怪勇後の近藤　（これは近代の怪勇士として有名なる近藤勇の一代記です）全二冊
○（日本魂）鮫島武雄
◎後の鮫島武雄　（これは軍人物の面白い新講談です）全二冊
○（天正三勇士）幽靈半之亟
○（天正三勇士）母里太兵衛
○（天正三勇士）飯田覺兵衛　（これは有名なる勇士傳にして至極勇壯活潑なものです）全三冊
○（天明俠客）文珠九助　（これは伏見の俠客文珠九助の傳記です全一冊）
○（大久保彥左衛門）木曾漫遊
○同　東海漫遊記　（これは大久保彥左衛門の諸國漫遊記です全二冊物）

◉玉龍亭一山講演

◎天明三人男
◎山田屋辰五郎
◎夕立勘五郎
これは演者が得意の専賣物で侠客物です　全三冊

◎（義侠の書生）大井道實
◎（不獻の毒婦）兒島お春
◎（可憐の靑年）小出仙太郎
これは人情新講談にして演者が得意の専賣物です　全三冊物

◉秋月玉光講演

◯（豪傑侠客）藥師の梅吉
◯同　後の藥師
◯同　其後の藥師
演者獨特の侠客物にして至極趣味の有る面白いものです

◯女侠龍神お玉
◎女侠後の龍神
◎侠客唐獅銀治
全六冊

◉旭堂南陵講演

◎豪傑靑地作右衛門
◎同　上總六郎
これ有名なる浪花三劔士の傳記にして南陵の専賣物

◎同　大力牛之助　全三冊
◎（戀の犯罪）松平辰子
◎同　屑屋鐵五郎
これは有名なる星亨氏の關係せる事件です　全二冊

◯海賊船東天丸
◯東天丸五良吉
これは南陵得意の新講談で面白いものです　全二冊

◯侠客劔の電次
◯同　甲州定五郎
◯同　墨田の夜嵐
◯同　最後の血櫻
演者が十八番の讀物ですから面白い事は受合です　全四冊

◯（天正豪傑）加藤孫六嘉明
◯高倉長衛
◯後の高倉
これは有名なる會津騒動の御話でございます　全三冊

◯（旗本騒動）船越八郎
◯源三位の松
◯善惡お淺
これは演者獨特の讀物で至極趣味のある物　全三冊

◎赤格子九郎兵衛
◎入若大次郎
◎神崎堤百人斬
これは有名なる三都勇劔傳神崎堤百人斬の御話

◉福亭羽衣講演

◯（眞田豪傑）大力重太
◯同　忍術佐助
◯同　金崎英五郎
これは有名なる眞田家三勇士の剛壯活潑なる一代記でありまして演者得意の十八番物です

◉松林伯知講演

◎講談太平記
◎同　巻之二
◎同　巻之三
◎同　巻之四
◎同　巻之五
これは有名なる太平記を讀み易く講談に直したものです　全五冊讀切

◉玉田玉芳齋講演

◯（小松三勇士）後藤荒太郎
◯同　稲葉太郎
◯同　水間大八郎
これは有名なる小松三勇士の傳記です　全三冊にて讀切

◯豪傑杉本備前守
◯同　武田武者之助
◯同　武田鬼景
◯同　神刀忠次郎
◎豪傑勢揃箕輪城大仇討
これは豪傑が勢揃ひをして上州箕輪城にて大仇討をする勇壯なる御話　全五冊

◉桐野金城講演

◯（天下三傑）幽靈問答
◯怪談後日の幽靈
◎（天下三傑）最後の譽
◎産湯の森變化退治
これは有名なる大阪妖怪屋敷の由來記です

◉浮世亭夢丸講演

◎（侠客）時宗五郎兵衛
◎侠客後の時宗
これは演者得意の面白い侠客です

◎浪花節侠客揃
◎同　勇士揃
◎同　武勇競
附の浪花節稽古本です

◉山崎琴書講演

◯（怪美人）伊藤夏子
これは演者得意の探偵新講談でありまして伊藤夏子といふ毒婦の一代記です

東光齋改め ◉松月堂林楳講演

◯（日本三槍傳）佐分利左内
◯（日本三槍傳）大島伴六
◯（日本三槍傳）梅田杢之亟
これは槍術の三大家として名も高き上記三豪傑の傳記なり

◉神田伯海講演

○(實說講談)お俊傳兵衛
○お俊傳兵衛後日談
これは至極情愛のある面白いものです　全二册

○怪傑金忠輔
○同　後の金忠輔
○同　其後の金忠輔
これは有名なる豪傑金忠輔の面白い一代記です

○(仇討)摩耶山靈驗記
一册讀切の仇討物です

○豪傑瀨川采女吉次
◎同　後の瀨川采女
有名なる瀨川采女の趣味變化に富む一代記です

○講演滑稽揃
面白い滑稽集です

◉神田伯龍・玉田玉秀齋合演

○美少年錄
○後の美少年錄
◎其後の美少年錄
◎最後の美少年錄
これは有名なる美少年錄を講談にしたもので至極情合のある面白いものです

◉神田伯鱗講演

○素人探偵
面白い探偵新講談です一册讀切

◉平林黑猿講演

○俠客祐天吉松
○義俠水戶黃五郎
○幻金五郎
これは演者得意の讀物にして至極面白い俠客物です

◉秋津洲櫻香講演

○怪談不思議の家
これは新怪談物です一册讀切

◉東海亭金龍講演

◎(忠孝)二代の勇士
◎(怪童)飯田友千代
これは加藤家の遺臣怪童飯田友千代の一代記です

○(武勇の響)槍の小太郎
○(四十八番)御前大試合
これは面白い豪傑物です　全二册

○怪談水谷騷動
○怪談後の水谷騷動
これは怪談物で御家騷動記です

○俠客伊丹の與之助
◎女俠伊達のお峯
◎俠客歡喜天安太郎
これは俠客物で三册續の物です

◉南陵改め旭堂一道講演

○義信夫常吉
○後の信夫の常吉
○最後の信夫
これ全三册讀切俠客物です

◉松月堂魯山講演

◎劍客木曾庄九郎
◎同　木曾白雲齋
これは有名なる劍客木曾白雲齋先生の傳なり　全二册

○磯畑伴藏秀國
○磯畑伴藏旅日記
これは有名なる豪傑磯畑伴藏先生の傳なり　全二册

○(鐘捲流祖)鐘捲通家自齋
○鐘捲自齋巡國記
これは鐘捲流の元祖通家入道自齋先生の傳記です　全二册

○龜井名槍傳
○豪傑龜井武藏
これは槍術の大家龜井新十郎先生の傳記です　全二册

○(劍法名人)諸岡大天狗
○(劍法名人)岩間小天狗
○(劍客)土子泥之助
これは諸岡一羽齋、岩間小熊、土子泥之助の三劍士の傳なり　全三册

○(東軍流祖)川崎東軍坊
○(劍法名人)衣斐丹石入道
○飯沼鐵牛軒
◎剛勇齋藤傳鬼坊
◎豪傑小松一卜齋
◎同　人見熊之助
これは東軍流祖川崎東軍坊を初め衣斐丹石や齋藤傳鬼坊、其他三劍士の銘々傳なり　全六册

花鳥叢書

探偵小說血染の手巾
戀しき仇
幽靈船
落語金馬集
幻術使の仙冠者義虎
天狗の術を使ふ木鼠小法師
荒象閻鬼門
槍の小太郎
四十八番御前大試合
槍術名人佐分利左內
日本武術流祖錄
磯畑伴造天下漫遊記
疋田文五郎旅日記
蜂猫退治春日武勇傳
怪猫退治春日旅日記
眞田の三傑大力重太
眞田の三傑忍術佐助
眞田の三傑金崎英五郎
後藤又兵衛諸國旅日記
怪奇小說魔の棲む洞窟
怪勇朝比奈三郎義秀
忍術名人木村太郎丸
鎮西八郎爲朝
怪談幽靈の出る池

以下百編迄續々發行いたします
定價各廿五錢　郵税一册二錢

渡邊默禪君著　川上恒茂君畫

事實小說　**女獅子**

全三冊
實價各一册四拾五錢
郵税料各一册金六錢

著者默禪子自白ふ、予、從來事實譚なるものに筆を着けしこと數十回に達したるも、未だかゝる大規模の大事實に手を染めたることあらず……實に然り……遙に文久年間に其端緒を發きて明治三十七年に其の尾を曳き、前後四十有餘年の永きに跨れる、天下稀有の一女傑が傳記にして、關係の局面甚だ濶く、變幻怪奇の波瀾縱横錯出、殆んご應接に暇なからんとす、乞ふ愛讀をたまへ

渡邊默禪氏著
長谷川小信氏畫

事實小說　**怪の怪**

全二册
表紙口繪
極彩色美本
實價各一册
金四拾五錢
郵税各一册
金六錢

これは文名東都に鳴る渡邊默禪子が、天馬奔空の快筆を揮ッて、黒石子爵家大波瀾の眞相を描寫した、奇々怪々の怪小說であるから、是非一册は購て見玉へと、隆文館の主人が御勸告をする……

巖谷小波君序
山岸荷葉君著　鏑木清方君畫

小說　**五人娘**

全一冊
美術木版畫挿入
實價金四拾五錢
郵税料金六錢

山岸荷葉君の文は、既に世に定まれる評あり、本書は、子が獨得の麗筆を揮つて、可憐愛すべき五人娘の運命を叙せるもの、加ふるに鏑木清方子が丹精を凝せる、木版極彩色數十度摺の美人畫を以てす、眞にこれ、文艷裝美無比の好讀物

牛井桃水君著
高橋舟齋君畫

探偵小說　**贋造紙幣**

全一册。
實價金四拾五錢
郵税料金六錢

水や天、天や水なる太平洋の中央に於て、漁夫が偶然に得し一箇の密閉せる小瓶子の中より、一世を欺罔せる大奸賊の罪惡は、意外にも世間に暴露するに至れり、されご注意深く巧妙に行はれたる犯罪の眞相は、一朝一夕にして探り知る能はず、流石に老練なる探偵博士をして、如何に慘憺たる苦心をせしむるか、これ一篇の讀みごころである乞ふ愛讀を賜へ。

江見水蔭君作　八幡白帆君畫

中央新聞掲載小說　**大正五人女**

全五册
木版手摺
極彩色美人
挿畫附
定價各一册五十錢宛
送料各一册六錢宛

全五册一時に御注文の方に限り送料共に特價金貳圓（但し內地限り）

本篇は約九ケ月の長期に亘り、東都中央新聞に掲載せられて空前の好評を博し、中外數十萬の讀者をして心醉歡喜しめたる一大活劇小說にして實に過去に於ける數多き水蔭先生の作物中にても拔群傑出せる最長の雄篇である。

編中に活現する女の種類には、女優あり、藝妓あり、猛獸使ひの女あり、富豪の奥樣あり、墮落女學生あり、賢夫人あり、薄馬鹿女中あり、淫婦、毒婦、菩薩、夜叉、個々入り亂れて興味深き大活動をなし舞臺の變化幻奇妙怪を極めた、近來稀に見るの面白き小說である。

渡邊默禪君作

口繪執筆者（歌川國松君　川上恒茂君　谷洗馬君　長谷川小信君　鈴木錦泉君）艶麗極彩色口繪挿入美本

日本新聞掲載小説

千里眼 横山花子

全三冊ニ付　實價一圓四十錢（送料共にて）

全二冊ニ付　實價金一　圓（送料共にて）

本書は日本新聞に連載して大好評を博したる事實小説にして、今を去る二十餘年以前江州に現はれたる、横山花子と云へる可憐の一美人が、神通自在の術を弄して魔法使ひとして驚嘆されたる幻怪奇譎の事實を寫したるものなれども、其裏面には悲慘骨を刳り肉を刻むの消息がある彼女の父は東京府の參事片桐義郷、母は柳橋で嬌名を唄はれし梅吉、しかも薄命可憐なる花子は、僅に三歲、父母に生別してより以來、流離飄零具に辛酸を嘗め、遂に或る動機の捉ふる所となり了して天下の珍たる其身を捧げて蒼波渺茫たる琵琶湖上に奔り去る、其生涯二十餘年の徑路を寫す間に、靈と肉との戰ひ、個人と社會の葛藤の如何に險惡峻烈なるかを說きたる、默禪先生最も得意會心の作にして、其筆力は艶麗にして繪を見るが如く精巧に、其の內容の千波萬波寄せ來つて波瀾重疊の妙を極む、乞ふ一讀して其言の誣らざるを知られよ。

島川七石君作　山本英春君畫

戀のしがらみ 全三冊

蘭子と信吉 全三冊

木版手摺極彩美人挿畫附

定價各一冊五十錢宛

送料各一冊六　錢

全六冊一時に御注文の方に限り送料共に

特價　貳圓五拾錢

（但し內地限り）

本書は、著者が一代の心血を傾注して創作せられし一大雄篇にして、其內容たるや、主人公は健實なる志想を抱いて帝都に苦學する一靑年を以てし、此快男子に配するに、可憐なる麗人、失戀の令孃、奸譎悄むべき賣國奴、刺客、女優、老政治家、歌妓、亡命の志士、不良靑年、變裝刑事、其他社會に在らゆる階級の人物をば、舞臺の變化と共に活躍せしめて、以て讀者を起伏重疊たる情海の波瀾の中に捲き込まんとする、眞に近來稀に見る良家庭小說にして、又絕好の立志的戀愛悲劇小說である、乞ふ愛讀を賜はらん事を。

新田静湾君作

谷洗馬君畫

立志小説 富の力

猛虎と見ては石に箭の穿ちし故事もある、精神一到何事をか爲し得ざらめやと、一朝、富の力の壓迫の大なるに感奮して、猛然志を立て、故郷の地を去り、帝都に出でたる水呑百姓の子倅は、僅々十年の短日月の間に、能く百萬圓の大富豪と成り得た、彼は如何なる手段方法にて此富を得たか、如何に奮闘努力して此富を得たか、彼をしてかく發奮せしめたる動機は何、其處に讀者を感動せしむべき血と涙との物語があるのだ。

各冊共木版
極彩色口繪挿入
全三冊
實價各一冊四十五錢宛
送料三冊ニ付八錢

211
496